セレウェス滞在記

永江　勝朗

第１話　セレウェスは私の青春

私は１９４２年から１９４６年、１９歳から２３歳まで、南セレベスに会社員として働いていました。特に１年半は飛行場に近いマロスに駐在していました。セレベスは私の青春であり、学び舎でした。

１９４２年から４７年まで南セレベス、中でもマロスには一年半位住んで居ましたから馴染みは深いのです。でもマロスには、２度ゆきましたが、市街の変わり様が大きすぎて、懐かしさがこみ上げてこないのです。５０余年と言うのは変わって当たり前なのでしょうが、そんなことから、前から行って見たかったマナドの落ち着いた風光に触れて、すっかり病みつきになった次第です。マカッサルについて何かと言うお申し出ですので、その内にぼつぼつ思い出したことを書いてみます。本当は私の青春なんですから・・・。１９歳になったばかりから２４歳までです。一番いとおしい時間でした。

南セレウエシの海軍の占領は４２年４月で、私の行ったのは７月２３日でしたから、直後と言って良いでしょう。横浜は６月１５日に立ちました。途中横須賀，大阪、神戸、関門海峡、玄界灘、那覇、キイルン、香港、マニラ、ダバオ、タラカン、バリックパパンと辿って、マカッサルにはいったのです。約４０日、時間はかかってこのままでは永久に船を下りられないのではないかと思ったほどでしたが、無事岡に上がることができました。その上に北海道の、そのまた田舎から行った子供には夢のような洋風の生活が待っていたのです。舞い上がるほど嬉しかったですね。
私のセレウェスはそんな処から始まったのです。

第２話　南洋貿易会社と言う名前をご存じですか

南洋貿易会社と言う名前をご存じですか。この会社は昔内南洋と言ったサイパン、パラオ、トラックなど太平洋諸島で椰子の実などを買って、日用雑貨を売るそんな仕事から、発展し、マナドに出たのは大正の初期だったようです。

マカッサルは当時から東の地域の物産の集散地でしたから、戦前支店を開設して、交易に参加していたようです。会社は小さいけれど特異な存在だったようです。この会社に昭和１７年１９４２年５月、１９歳寸前に見習いで入社しました。叔父がこの会社の古株、そのコネでした。

１９４２年と言うとご存じでしょう。４１年１２月８日に日本はアメリカ、イギリス他連合軍に戦争を仕掛けたのです。その翌年春南セレベスが日本海軍陸戦隊によって占領され、その後にこの会社は南セレベスの米を集める任務を与えられました。私は

その要員の一人として、派遣され、敗戦を迎え、収容所生活を経て４６年５月パレパレ港から名古屋港に引き揚げたのです。ですから、約満４年居たことになります。住んだのはマカッサル、センカン、ジャラン、パレパレ、ピンラン、ソッペン、スングミナサ、マロス。スリリ(収容所)と言った順番です。わりと歩いた方ですね。

第３話　少年は南の国に行きたかった

私の育ったのは、北海道の首都札幌から南へ１００キロ、高原の「倶知安」人口１万７千人の街です。道内指折りの多雪地、雪は１１月から４月まであります。こんな処から少年が南の国を志したのには、いくつかわけがありました。

一つは､叔父が大正末期から戦前日本の委任統治地だった　南洋群島トラック諸島の南洋貿易会社に勤めていました。２，３年毎に帰国、その度に椰子の実細工、絵はがき、アルバムなど南洋の風物をもたらしました。これが憧れの原点になったのです。１９２５年当時、小学生の人気雑誌「少年倶楽部」に」連載漫画「冒険ダン吉」は、日本の少年が、海で遭難、漂流、南の国に漂着、そこで王様になるお話です。これもずいぶん少年の夢をかき立てたものです。

私の育った頃の北海道は､開拓が始まって４，５０年です｡第一次欧州大戦が終わり、不況、不作などで痛手を受けた開拓者は、樺太、南米へ、更なる「青い鳥」を求めて、再移住する人も多く､住民は定住以前の時代でした｡祖父は島根県の農家の次男坊で、東京で測量技術を修め、１８９０年代に単身北海道に渡りました｡祖父にも南米移住の思いもあったらしく､長男の父を農業技術者にし､叔父を東京･世田谷にあった｢日本植民学校」で、スペイン語を学ばせました｡結局叔父は南洋に就職しました｡１９３５年頃から、日本人の満州(中国・東北)への　移住は盛んになりましたが、北海道の移住熱はあまり高く無かったようです｡

もう一つの私の南志向のもとは雪でした｡小学校２年から住んだ家は、街から離れた１軒屋で、冬辺りは２メートルの雪に覆われました｡そこに住んだ時から除雪は私の仕事になっていました｡スキーで遊んだ楽しい記憶もありますが、やはり「雪のない処に行きたい」願いは心に染み込んでいました｡

日本の現代を「戦前、戦後」に分けて言いますが、戦前の日本は「１９３１年満州事変から１９４５年の敗戦までの１５年」を休み無く戦争に明け暮れていました｡１９３０年に私は小学校に入りました｡学校を出たのは１９４１年１２月でしたから、正に戦争のさなかで大きくなったのです｡私は背も高く健康でしたから、日本にいたら兵隊間違いなしでした｡殆どの人はそれをあきらめの境地で待ったのです｡

往生ぎわの悪い私は、南洋では「兵隊延期が認められる」特例があると聞いていたこともあって、叔父に頼んで南洋貿易会社の就職の内定を貰っていたのです｡(この特例が実際にあったかどうか確かめていません)そんな矢先に太平洋戦争・・・就職内定もご破算・・暗然とした思いで、帰郷、仕方なく農業組合の臨時雇で日を過ごしていました｡それから４ケ月、戦争は調子良く展開、５月南洋貿易会社から待望の「採用通知」ようやく、南の国への道が開けたのです｡１９歳になる直前でした｡

第４話　いただいた命

戦争とはむごいものです。平和な今では想像つかない無造作に人命を失われました。兵士は「召集令状」一枚の命令書で、それまでの仕事も、家庭生活もそのまま放棄して、命ぜられた処に赴かねばなりませんでした。こうして１５年戦争で失われた兵士の命は２２０万人に上ったと言われています。この中で最も惨めだったのは、南の戦場へ渡航する途中、船が撃沈されて、むざむざ命を失った兵士、スラウェシ島に近いハルマヘラ・パプア・ニューギニアなど緑の島々で、生きる方法を知らず、飢餓のため命を失った兵士、戦争末期のフィリピンの戦争にも同様の悲惨な死がありました。

そんな事情を知ったのは、主に敗戦後のことですが、私にもマカッサルに渡航の前後に、２、３度「命拾い・命を頂いた」ことがあります。１度目は、日本で船を待つ間に起きました。１９４２年５月３０日北海道を発って上京、渋谷の先輩の下宿に転がり込んで、会社から「船待ち」を命ぜられました。

１、２日たって、実家から電報が来ました。「オトウトシロウ、キュウビョウスグカエレ・ハハ」電話事情の悪い時代、とても詳しいことを尋ねようがありません。あたふたと夜汽車１８時間をかけて帰宅しました。　２ケ月前、小学校入学式に私が手をつないで行った弟が「腸チフス」隔離病舎に入院、母が付き添っていました。病状はどうも私を呼び返さなければならないほどな重症には見えませんでした。元々母は私が外地に行くことに、最後まで同意しませんでした。それでどうしてももう１度呼び帰したかったのではないでしょうか。

６月８日会社から電報「トコウシタクニテスグライシャアレ・ナンボウ」。その夜、父と次弟の見送る夜汽車に乗り込みました。雲が低く垂れ込め、遠雷は鳴り気分の良くない旅発ちでした。

東京に戻ったら数日前「船は出て行った」行先はアンボン、ニューギニア、ラバウル方面とのこと、私の任地がどこだったかは知らないが、この内のどこであっても、後に悲劇的生死をさまよう状況に巻き込まれていたことは間違いがありません。母親の「虫の知らせ」が、私の命を救ってくれたように思うのです。

２度目はマカッサルに向かった船で起きました。船名は千早丸、１万トン級、上海にいた中国籍の貨客船で、開戦直後海軍が接収し、南方各地の海軍関係基地に配置される民間要員を送るもので、最終目的地はシンガポールとのこと、千人余りの人が乗っていました。私達の一行は６人、私以外は千葉各地からの農業技術者でした。

６月１５日横浜港出帆、翌７月２３日にマカッサル港の岸壁に到着しました。渡航３９日目のことです。私達は晴れ晴れと船を降りましたが、船にはまだ千人ほどの船客は残っていたようです。何日後かにジャワ島スラバヤに向かったのですが、その沖合で潜水艦の攻撃を受け、沈没、３分の１の人は救われなかったとのです。ずいぶん後になって、うわさのように聞きました。そう言えば私達がマカッサルに着く直前、対岸のバリックパパン（ボルネオ）からは、小さな駆潜艇が護衛、３日ほどの航海をし

ましたが、その恐れは何日もたたない内に、現実になっていたのです。

第５話　いざマカッサルへ！！　上陸のない３９日の航海

出発

１９４２年６月１０日私は満１９歳になりました。東京に戻って数日後辞令交付「見習社員」行先は、蘭印・セレベス・マカッサル支店・・でもそれがどこにあって、どんな処か全く見当も付きませんでした。（蘭印＝オランダ領インドネシア）

６月１４日夜「明日乗船、すぐ出社せよ」電話連絡を受け、慌ただしく日本橋の本社にトランク１つと東京で買ったヘルメットを持って集合、１夜を明かし１５日朝、横浜・桜木町から、横浜港岸壁に行き、着いていた船に乗り込みました。船は貨客船千早丸、以前は中国の海岸で人や貨物を運んだものらしく、処々に中国語の表示がありました。

ねぐら　船室などはありません。何層にも分かれた船倉・蚕棚(かいこだな)、私達は船首近くの右がわ、甲板から２段目の１偶にござを敷き、毛布を敷いてそこが人の居住空間、窓はありました。もちろん雑魚寝（ざこね）です。

同行者　私の外５人、皆千葉県各地から集まった農業技術者、皆日本刀を持っていました。年長者は４２，３歳、中国大陸の兵隊経験あり、中国語を話し、成田で「やし」だったとのこと、時々私達に「はっぱ」をかけます。親分と奉つりました。以下２６，７歳の髭づらの人、私と同年が２人、年下が１人でした。

関東弁　戦争の影響で、北海道は本州への修学旅行が中止になっていたから、私は東京に来たのは初めてでした。「東京弁」は大学に進んだ先輩が話すのを時々聞かされましたが、調子が軽く照れくさく、馴染めないでいました。同行する人達は東京の隣りの千葉だと云うのに、ひどく言葉が違うのが驚きでした。「おめぇ・・何だぁ・・そうだっぺ・・」と言う調子です。始めは１人浮いていましたが、そのうちそれなりに仲間に入れて貰えました。

中国人　船員で乗っていて、乗客のいるあたりを掃除していました。大人しい顔の多い中に、凄い面がまえの者もいました。船を接収し、その乗組員をそのまま連れて来たのでしょうか。

食事　１日朝昼夕３度出ました。御飯は麦飯、１什１菜でした。どんな１菜が出たか全然覚えていません。塩豚の味噌汁が頻繁に出たのは記憶しています。

航海が始まる

乗船の翌朝、船が動き横須賀港に行き給油、その後また横浜港へ戻って夜を待って、出帆しました。もう港で見送る人はおりません。海峡を越え外洋に出たら、船の作る波が夜光虫にキラキラ輝きました。初めての海の感動でした。

神戸港　沖泊り、六甲山地に雲が黒く被っていました。荷物や人を載せました。

関門海峡　夕方差しかかりました。門司側は手を伸ばすと届く程の海岸に、民家が建ち並んでいました。その家々の広い窓から、沢山の人達が旗を振って見送ってくれました。私達も応えて手を振りました。

玄海灘　真っ暗闇の海、雨もまじりシケのようでした。
ここ迄来て全乗客は徹夜交代で、船のあちこちに立ち「潜水艦の監視」をすることになりましたが、夜の海はいくら目を凝らしても本当は何も見えないのです。波しぶき、雨、うねり、船首では「シーソー」の様に十メートルも上下します。一行の大半は船酔いでやられました。私は幸い全くこたえません。自分が「船に強い」と知った貴重な体験でした。この頃の私達に「敵・潜水艦」への怖さは全く持っていませんでした。ですから、監視も面白くない辛い仕事、仕方無しにやらされている子供達のような心境でした。もちろん、この夜は何事もありませんでした。

那覇港　港近くの沖泊まりです。曇っていましたが、目の前の海岸の崖の上に、赤く塗られた小さな社「波の上宮」が建ち、とても美しく印象的でした。

基隆　６月２５日、乗船から１１日目、台北の外港、基隆岸壁に着きました。山の近い所らしく、港の全容が見えません。

本土以外の煙草を始めて味わいました。この日出した手紙は、７月１日に北海道に着いたようですが、１頁半検閲で削除されていました。それまでの航海を詳しく書いた処でしょう。（検閲＝手紙を調べ、気にいらない処はハサミで切り取る）

香港　沖泊まり。英国が東洋百年経営の拠点港です。大きな岩山の島々、海岸には山の頂きに届くほど、東京でも見なかった高いビルが立ち並んで見え、山の中腹にも白塗りのホテル、別荘らしい建物がありました。その間に黒い銃眼を備えた砲台がこちらを向いていました。船に近づく小さな舟、かい三丁で漕いでいました。連中は物売り、シャツ、ズボン、タオル、靴下などです。粗末な品質だが、飛んでもなく安い。それを値切って、篭にお金（日本円）を入れて下ろします。私もペラペラのシャツを１円で買いました。銭を投げると海に潜って取る子供達もいました。

マニラ　マニラ湾の入口にコレヒドール島が見えました。ほんの何ケ月前に陸軍が攻略した要塞島です。後に日本本土を占領、連合軍の司令官として君臨したマッカーサーは、陥落直前この島からオーストラリァに脱出したのでした。マニラは海から見ると、ずっと奥まで平地が続いて、海岸に大きな市街が開け、並木、芝生、舗装道路、建物がとても美しい。自動車は多く、内地で見たことのない高級車も走っていました。船はマニラ港岸壁に着いたのですが、乗客の大半は上陸できません。ここで始めて南の人を見ました。荷役の人夫でしょうが、広つばの帽子を斜めにかぶって、ひどくアメリカ臭さを感じたものです。上陸した人の話では物価は大変安く、コーヒーとケーキで５セント、靴は５，６円（ドル）で無論本物が売っているとのとでした。（本物＝内地でこの頃民需品は、総て代用品でした。ドル＝戦争前１ドルは２円位とでたが、

日本軍は占領後「軍票」を発行、ドルと等価として流通させました）マニラの夕日が名物と聞いていましたが、やはり素晴らしかった。

船の中の交流　客の中にマレーシア２０年、ダヴァオ在住１０年と言う人達がいて、現地事情を色々教わりました。ここでマレー語も少し習い始めました。

美しい島々　マニラ港を出て南下しました。椰子の木の生えた白い砂浜、波、絵のような小さな美しい島が、次々見えて過ぎて行きました。多分スルー列島の一部だったのでしょう。

海軍のバッタを食う（精神棒）　綺麗な海を眺め、ロマンチックな気分で甲板に出ている内に、女性と交流してはいけないことなっていたのですが、少年はシンガポールに行く女の子と知り合いました。２、３度会っている内に、監督の海軍の下士官に見つかりました。「手を上げて立て・・歯を食いしばれ・・」その尻にバッタを５，６発食わされました。海軍の体罰、手加減などはありません。痛いを通り越しもう立っていられないのです。がっくり崩れ落ち、友人に抱きかかえられて寝床に戻り、腰腹ばいになったまま３、４日過ごしました。女の子・・ロマンスは波の彼方に消えて行きました。海軍の連中から見ると、命を賭けて戦った海で、自分より若い者が禁を破って、女の子とジャラジャラしているのはとても許せなかったのでしょう。気持ちはよく分かるけど、ひどく痛かった・・。（精神棒・直径３センチほどの樫の棒です）

ダバオ　マニラから２泊の航海です。ここには沢山の人が降りました。船は沖泊り２泊しました。当時ダバオ周辺に多くの日本人が住んでいるのを聞いた気はするのですが、その後長い間忘れておりました。太平洋戦争開始後、ダバオはフィリピンで真っ先に日本軍に占領されました。２万人の在留邦人が、開戦直後収容所に収容されれ、過酷に扱われたとも聞きました。邦人が５０年かけて開拓したマニラ麻の畑は、急遽軍の食糧供給基地に変られていたようです。これも攻略の目的の一つだったかも知れません。（１９８７年８月・私はミンダナオ島を訪れ、以後ダバオ日系人自立支援ボランティアとして、昨年まで１４回尋ねていますが、この時は４５年後にそんなことがあろうとは、夢にも思いませんでした）海岸にはマングロープがうっそうと茂り、内陸は全くうかがえません。でもここで上がった果物（パパイヤ）は美味しかった。初めて味わった南国の果物です。現在もダバオはフィリピン有数の果物の産地、中でもドリアンが名物です。

タラカン島　ボルネオ島の北部、オランダ領に入ったのです。石油の産地とのこと、島中が緑で陸地が見えませんでした。沖泊まり。オランダ軍捕虜が船荷役に来ました。インドネシア、オランダが混じっていますが同じ服装です。インドネシア人を初めて見ました。荷役は上級者がクレーン係、兵隊が船底で荷物を「もっこ」に入れています。和気あいあい冗談も交え朗らかでした。

赤道祭り　７月１６日朝１０時、赤道を越えました。
お祭りは楽しいものでした。船長以下乗組員、一部乗客も演技者になりました。赤道の神様に１人の子供が大刀持ちになり、３人の稚児が塩、三宝、麻糸の束ねたお払いを持ち、それに鯛、平目、たこの装束の家来が大きな黒い箱を持って続きます。　船

長は赤道の神に願い、大きな鍵を貰い、魚の持つ黒い箱を開けます。箱には海図は入っていて、初めて赤道を越えることができました。その後は、余興、演芸が続きました。「対潜水艦監視」は続いていましたが、航海はまだそんなのんびりムードだったのです。

バリックパパン　７月１７日着、広い河口らしい処で沖泊まり、ボルネオ島、（今はカリマンタン島）私達の目的地マカッサルの対岸に来たのです。石油基地ですが、辺りには何もなく殺風景な処でした。ここまで航海は３５日位「目的地は近い・・・」理屈で分かっていても「いやいやこの船から、永久に下船できないのではないか」払っても払っても妄想が襲って来たことを思い出します。ここから小さい駆潜艇が護衛に着きました。

マカッサル港の意外　７月２３日やっと船が着きました。港は５００メートルもある岸壁を備え、倉庫もずらり並び、故郷に近い「小樽港よりはるかに大きくて立派だ」と思いました。上陸となり甲板から岸壁にいる迎えの人を見ると、見たことがあります。「そんな筈がない・・・」降りて聞いたらやはり東京本社で一緒にいた人でした。２週間前、当時の最優秀客船「鎌倉丸」（元アメリカ航路専用船）に会社のマカッサル支店の幹部と中堅処が便乗、船は横浜を出てマカッサルへ直航１週間、着いて丁度１週間と云うのです。唖然とするばかりです。私達の３９日航海は１体何だったでしょう。

南の国の第１頁 負け惜しみではなく、航海には沢山の収穫がありました。１度も上陸できなかったとは言え、これだけ多くの海を渡り、十ケ所もの港を眺め、沢山の人達と交流しました。海軍のバッタも食いました。同行したＧ君とは、セレベス滞在中も親交を深め、戦後も付合いが続きました。Ｇ君は１９７０年代からマカッサル・バリに通算８年間住んだのですが、１９９１年彼の案内で私は５０年ぶりにマカッサルを訪れることになりました。これを契機に私のインドネシア通いが始まったのです。この３９日間は、忘れがたい貴重な南の国の１頁になりました。

心が痛む　幸い私達は何事もなく長い航海を終え、陸に上がることができました。しかし千早丸遭難を聞いてからは、マカッサルを思い出す度に、きっと知り合ったマライ在住の方達、シンガポール行きの女の子、バッタを食わせた海軍さん、中国人、赤道祭りをしてくれた船長、船員さん達の行く末を考えてしまいます。

第６話　夢の街マカッサル

軍政下のマカッサル １９４２年昭和１７年１月１１日海軍の落下傘部隊は、北セレベス・マナド市外、ラングアン飛行場に降下、別にビトン港に近いケマ海岸に上陸した陸戦隊とともにマナド地区を制圧しました。４月には南セレベス・マカッサルを占領しました。マカッサル地区攻略戦では、マロス・チャンバ道路で激戦があり、日本側に戦死者 が出ましたが、全体の損害は軽微で、市街に戦闘の傷跡は全く見当りません。５月頃豪州から爆撃機が襲来し、地元にいた海軍機と空中戦を行い、海軍機が体当りで撃墜したと日本にいるうちにニュースで聞いたことがあります。

オランダ統治時代セレベス島から東方パプア島までは「大東州」と云ったようです。それがそっくり日本海軍の軍政管轄となったのです。州都としたのは、やはりマカッサル市で、私の行った頃は民政部だけでしたが、後に州民政府が設けられました。軍政の実態は、日本の中央政府、地方都道府県から派遣された文官が、総てを仕切っていました。海軍ですから陸戦隊はいるはずですが、兵隊たちはどこにいたのでしょう。指令部の玄関に衛兵が立っていたくらい、街頭で兵士の姿を見ることは殆どありませんでした。

戦争の状況 この年６月に、太平洋ミッドウェイ海戦で、日本海軍が大敗、それからアメリカの本格反撃が始まるのですが、情報は管理され、悪いニュースはまったく私達の耳に聞こえて来ませんでした。ですから６月から３９日間の航海中は恐怖心も緊張感も持たずに済みましたし、マカッサルもも前通りの暮らしが続いていました。短波放送の聞けるラジオが残されていて、１、２度外国放送を聞いたことがありましたが、音質が悪く聞きずらく、もちろん聞いてはならないことになっていたし、無理に聞く気にはなりませんでした。軍発表に信頼すると言うより、皆事態を楽観し切っていたのかもしれません。

南洋貿易会社 小さな会社ながら、南洋群島（サイパン・パラオ・トラック・マーシャルなどの島）での長い商業活動から海軍とは、密接な結びつきがあったようです。セレベスはマナドとマカッサル支店が、大正５年に開設されたとあり、コプラ、メイズ、綿、コーヒー、ココア、タンニン剤などを扱っていたようです。

会社のマカッサル地域の土地感は抜きん出ていました。そんなことから前「南貿」マカッサル支店長の山崎軍太さんが、特命でマカッサル市長に任命されていました。ちなみにパレパレ市長は、三井物産出身のの牧野さんでした。南セレベスは、海軍軍政下では唯一の纏まった米作地帯でした。会社はこの地域の「米の集荷・供給と海軍への野菜、食品、の供給する」大使命を与えられたのでした。

最も早くマカッサルに来た人達は、直接南洋群島から私達より１、２月も前に渡航、仕事を始めていた様子でした。沖縄・糸満の「追い込み漁業」を主力とした、マカッサル水産会社をすでに進出させていました。

ＮＫＫ ７月１日、私達の航海中に南洋貿易会社（ＮＢＫ）は南洋興発会社に合併していました。南洋興発会社の事業の柱は南洋群島、サイパン、テニアン島の砂糖黍栽、砂糖生産でしたが、１９４４年この島は戦場となり、全施設と数多くの生産者、従業員、家族を玉砕戦で一挙に失い、終わった会社です。セレベスではＮＫＫ（エヌカーカー）と名乗りました。八月、南興社長栗林徳一さん（北海道・室蘭・栗林商船会社社長）が、南方に展開した支店を歴訪、新しい体制が整ってゆきました。

マカッサルに上陸 さて、７月２３日大航海から解放され、上陸できた６人はティガローダ（ベチャ）に乗り、会社の事務所に向いました。岸壁のギラギラと太陽に焼けかえる舗道を暫く走って、うっそうと街路樹の茂る広い舗装道路に入り、高級住宅地街「プリンセンラーン」４３番地の大きな住宅を事務所にしたマカッサル支店に着きました。今の地図を見ると「プリンセンラーン」は「Tolempangan-St」でないかと思うのです。１９９１，９６と訪れた時、地番を頼りに尋ねたのですが、建物が皆変

わっていて結局所在がつかめませんでした。プリンセンラーンは戦時中「たちばな通り」と改名されたようです。

事務屋になる　所長にお会いしました。当時は五十代、南貿会社の社暦は古く前職はトラック島支店長、叔父はこの方の下で次長をしていていましたから、私がその甥であるのは承知してくれていました。私達は「野菜栽培技術指導員」で派遣されましたが、私の他５人は千葉の農学校出身で、農家だったり本物の技術者でした。私も一応北海道の農学校出ですが、何しろ北国、家庭菜園の菜っぱもいじったことがなかったのです。

「会社に入るまで何をしていた・・」「１２月学校を出て、地元の産業組合臨時雇で算盤の稽古をしていました」　「そうか、それなら事務所で庶務の手伝いをやりなさい」

即決です。他に適当な見習いになれそうなのがいなかったからか、北海道で一冬家の中で過ごして、日に焼けていない生っちょろい顔をしていたのを配慮して下さったか、多分両方でしょう。「事務屋永江」がここで誕生したのです。所長はこの直後、マカッサル水産会社に転属しました。

主任はお殿様

庶務、会計主任Mさんは東大考古学卒業、私より１０歳年長、徳川家親藩岐阜・高須藩第１６代の子爵です。色白でふっくらとして、如何にも高貴な方に見えました。自宅から、毎月２００円の仕送りを受けていました。私と同じ本州避難組です。本物の殿様と向かい合っての毎日、係員は私１人、心許ない出発でした。避難組には元俳優という人もいました。一緒に来た４人は、既に発足していた高原「マリノ」野菜農場に行き、成田の親分は佃煮製造の経験が買われてそちらに回りました。後に私は「米穀部」に配置替えになりましたが、マカッサル支店勤務は７ケ月続きました。

ミン・コレア（明・高麗）

昼寝の時間に戸毎に古い陶磁器を売りに来ました。マカッサルで陶磁器をこう呼びました。Mさんはそれが専門、陶磁器のことを教えてくれました。「昔カンボチャ、中国とこの地方の海産物その他の品を盛んに交易した頃、陶磁器は貨幣の代わりに使われた貴重なものだ。この陶磁器の出処は、近郊スングミナサにあるラジャー・ゴア（土候）一族の墓の副葬品を盗掘したもの、その頃のものに間違いはない。気にいった品があれば手に入れたら良い。」。私も小さい品をいくつか手に入れ宝物にしていましが、移動の度に皆無くしました。

給料　一　東京本社で貰った辞令では「月額４３円（ルピア）」でした。この他に海外手当が１０割付きましたが、これは実家に送られていました。１ルピアは、戦前平和時は２円位の交換比率だったようです。そこへ乗り込んで、１対１の割で「軍票＝戦地だけで通用させた札」を流通させました。

文化ショック

心得　会社が外国経験の長いので、この土地で日本人として日常の生活をどう過ごすかその心得を言い渡されました。

１、裸、裸足で外に出ないこと。
２、街頭で立ち食いなどをしないこと。
３、家庭使用人とは一線を画し、べたべたと付きあわないこと。

住まい　４８番地角の住宅の１室を与えられました。「プリンセンラーン」（アンパプルラパン）は最初に真剣に覚えたマライ語、これを 言わなければ帰って来れないからです。住宅の前に紅い花が咲き乱れていました。ブーゲンビリアと言うのでしょうか。廻りに大きな木が生え、森の中に家があるようでした。鳥の他に猿もいたようです。

通りの名前 オランダ語の名前が付けられていました。プリンセン・ラーンの他に、フェネラル・ファンダレン・ウェフ＝英語読みゼネラル・バンダレン・ウェィ、ゴア・ウェイが記憶にあります。

地番のつけ方 通りの右が奇数なら、左は必ず偶数でした。どんな小路にも名前があり、同じ要領で地番が決められていました。今もそうらしいですね。

家屋 全部煉瓦造りでした。地震のない処なので簡単に積み上げて作るようです。家主の大半が華系人、アルメニアの名もありました。国籍アルメニアというのは、ロシア人ということなのか、未だに良く分かりません。間取りはどの家も殆ど同じ、玄関に続いて廊下兼用の部屋が二つ、三つ続き、それに対応して寝室、この一番奥の部屋が水浴び兼トイレ室でした。母屋の奥の渡り廊下を挟んで厨房、下男（ジョンゴス）下女（バブ）の部屋がありました。

寝室 とても広くとっていました。ベッドも大きい木製、それに昔の王様の座席にかかっている「みす」のような、蚊帳が天井から吊られていました。ごろんとそこに横たわるとなんとも言えない満ち足りた気分です。戦後に行ったバリ、マカッサルのホテルで蚊帳は見たことがありません。日本同様蚊の駆除は解決済みなのかも知れません。

昼寝 あちらの勤め人は家で昼食をとり後昼寝をする習慣があって、私達もならいました。マライ語でなんと言ったか忘れました。寝る時にダッチ・ワイフ（長さ１メートル位の抱き枕）を使うのにもいつか慣れました。ちなみに私は後にデング熱にかかりましたが、マラリヤにはなりませんでした。プリンセンラーン通り、昼寝の時間帯は、トラック車の通行が禁止されていると聞きました。

カマルマンデイ 上等の家にはシャワーがありましたが、温水設備はなく、水溜めから柄杓ですくってかぶるのが普通でした。朝の水浴びはブルブルする位寒い感じ、でもこんな刺戟が南方の暮しに必要なんだと教えられました。

石鹸 ルックス 日本で使ってきたものに比べて、質が違うことは子どもでも分かり「すごい」と思いました。

水洗トイレ 水洗トイレもマカッサルで生まれて始めて出会ったようなものです。大体木の中ぶたがついていました。田舎に行くとこれが無い処もある。こんな時は日本式でやる外はありません。壁側にビール瓶が並んでいました。その瓶は私も半年後、田舎に行ってから使うようになりました。

ジョンゴス 各住宅には１人独身青年ジョンゴス（この職種を今何と呼ぶでしょう）がいて、掃除、洗濯、雑用を受け持っていました。

衣装替え　日本から着ていった長袖、長ズボンは、全く用をなしません。中国人の洋服屋が寸法を取り、カーキ色の半袖、半ズボンを二着、厚地の白の木綿の背広の上下を、またたく間に仕上げて来ました。靴も靴屋が来てスマートなのに新調、東京で買ったヘルメットの外は全部南方物になり、恰好だけは一週間前の渡航組に追いつきました。少しずつ物が増えて来たので、住宅を回って歩く物売りから「楠」の衣装箱を仕入れました。オランダ人の空家からせしめたものかもしれません。

食事　事務所の裏庭に厨房があり、母屋の奥に食堂が設けられていました。社員は全員単身ですから、ここで３食をとりました。ジャワ人のおばさんが「コッキィ」でした。本人はいつもシレの葉をグチャグチャ噛み、口は南蛮を食べるせいか真っ赤で、衛生的に見えなかったけれど、男女何人もの部下を指揮して、にぎやかに作る料理は皆さんお気に入っているようでした。

メニュー　記憶は薄れたけれど、北海道出身の少年には驚きの連続でした。朝の定番は、パン・目玉焼・スープ・牛乳（水牛の乳もありました）コーヒー（釜でぐらぐら煮立た濃厚なものでした）パパイヤ・ピーサン（バナナ）など果物は必ず出ました。私の町では、１９３６年に初めてパン屋が開業した位ですから、このメニューは、映画でも見たことのない、最大の文化ショックだったと言えるものでした。昼と夜のメニュー、鶏肉、豚肉、野菜スープ、それに御飯がとても美味しいかった。（米はこの会社が集荷していましたから、最高のお米を食べていたのです）お酒は飲まなかったので、大人達が何をたしなんでいたのでしょう。

食費　最初は月１５円で始まったのですが、毎日の物価の値上がりが大きく、数ケ月後に月１８円と固定し、以上の経費は会社持ちになりました。

海外生活経験者　「プリンセンラーン」住宅街なので、道を歩く日本人を多く見かけることがありました。中に体は私より小さく、相当年長なのに際立ってスマートな歩き方をする人がいました。うちの会社の人ではありません。首をあげ、胸を張り、手を振り、比較的大股に堂々としています。所謂「日本人離れ」をしていました。「あの人は何なんですか」「アメリカ帰りの人だよ」連れが教えてくれました。私の「心得」にもう一つ大きい項目が追加されたのです。

街の物売り　暑い日中様々な物売りが、独特ののどかな呼び声で通りを流して行きました。お客は各家庭の従業員のようでした。 カッチャン・ゴーレン！ ナシ・ゴーレン！ サッティ・アィアム！

自転車（スペダ）　　住宅の近くに女学校があり、時々下校の娘たちを見ました。少し色は黒いけれどそれは健康色で、手足はスラリ伸びスタイルは抜群です。その子達の多くが自転車で通学していました。自転車は日本で私の知っているものと大分違っています。タイヤの直径が大きいらしい、後は荷物台でなく、華奢な台でした。驚いたのは、後ろの台への乗り方、皆横乗りなのです。まことに「様になり」スマートに見えました。車はドイツ製だったようです。

第７話　マカッサル界隈にて

マライ語ことはじめ

会計係は落第　　庶務会計係見習になった私は、翌日から厨房と打合せのため、急いで「マライ語」を覚えなければなりませんでした。日本から持って行ったのは、小さな日マ辞典一冊です。（＊当時「バハサ・インドネシア」ではなく「バハサ・ムラユ」と言っていました。）事務所の大金庫に鍵を入れたまま、ドンと扉を締め、開けられなくしました。スペアの鍵が無いのです。叱られました。華系の職人が何日も掛かってやっと元どおりに直しました。

米穀課に移籍　　庶務係の成績が芳しくかったのと事務所が大きい場所に移転したのに合わせ、私は米穀課に移籍しました。課長はWさん、東京府下育ち、肝っ玉の太い人でした。米穀課の３年間、２０歳そこそこの私に次々大役を預け、その度に「一生懸命自分で考えてやって見ろ。失敗したら骨は拾ってやる」と送り出しました。力不足で、泣いて支店に戻ったこともあります。でも傷が癒えた頃また新しい任務を与えてくれました。一生を貫く信条の一つをここで身に付けたように思います。

最初の挨拶　　何故その時「セゲリー」に行っのたのか、記憶はないのですが、上陸後１月余りたった頃です。セゲリーはパレパレに行く途中、マロス、パンカヂェネを越えた先にあります。国道から左に入った海岸に近い田舎街です。「行ったら郡長に挨拶するんだよ・・」と課長に言われ、道々「どう言ったら良いか・・・」沿道の景色も目に入りません。「サヤ・オランニッポン、ナマ・ナガエ・・・」棒のように突っ立って、そこまでは言いましたが、その後「スラッマット・シアン・トアン」握手もしたと思うけど、上がりっ放しの記憶だけ、後はおぼろになりました。

ミナハサ喫茶

上陸したての頃、マカッサルのあちこちに日本人専用の「夜の喫茶店」が出来ていました。１つのテーブルに客１人女の子１人が付き、客の話相手をする。酒が出たかどうか、大人になる前の私に酒は用がなかったのですが、店で酔っ払いは見かけなかったようです。店のルールはこんなでした。コーヒーか紅茶、彼女と２人分を取ります。それは１杯５０銭、ですから２杯で１円、彼女へのプルセン５０銭（チップ・彼女たちの収入になるらしい）計１円５０銭が私の支出、これで一夜、テーブルと彼女を独占できます。最初連れて行ってくれた人は１船先に着いた年長の人です。場所は大埠頭に近い中華街の３階でした。　丸テーブルに椅子４脚のセットが１０組位、当時のことですから、音楽装置はありませんでした。先輩は私を紹介したままそれきり来なかったので、会社で通ったのは私だけでした。

当時「海軍特別警察隊」が在留日本人の風紀を取り締まりや、憲兵の役もしていましたが、この喫茶店は公認らしく、警察隊の立ち入りはありませんでした。考えたら私のようなケチな客ばかりで店が成り立ったのかと思います。しかし裏商売は無いように見えました。彼女達の多くは、親がオランダ人に近い位置にいたミナハサ人達で、親が失業したり、家庭の事情で働くことになった２０歳前後、女学校卒業か中退、キリスト教信者の人達です。私が偶然指名した彼女もミナハサ娘、背は高い方で１８歳でした。美人ではなく地味で、年のわりに落ち着いて付き合い易くかったのです。名前は忘れてしまいました。服装は普通の洋装でしたが詳しくは覚えていません。化粧をしていたのでしょうか。女性がズボンの服装はまだない頃です。 私は４人兄弟の長男坊、日本では隣りの女の子と親しくしても叱られる時代でしたから、人生で異性との交遊は、おふくろの次がこのミナハサ嬢だったのです。当然大変高揚したと思います。 誰かが先に行って指名すると、その夜のデートは駄目になるのですが、そんな目にあった記憶が無いのは、いつも早く行ったか、ひまだったのか、売れなかったのかですね。

夕食が終わると、殆ど毎晩通いました。行きは急いでティガローダー（ベチャ・三輪車）だったでしょう。何時間も、不自由な言葉で一体何を話していたのか・・・。「アパ・イニ、アパ・ナマ」「月がきれいだ、星が光っている、この花の名前はなに？歌を教えて・・」などと言った覚えはあります。前の晩に覚えた言葉、日中仕事で習った言葉を、皆んな思い出してビチャラ・ビチャラ話します。帰ったら辞書と首っぴきに復習でした。艶っぽい処に発展する余裕はなかったようです。

帰り道のコーラス

店が終るのを待って、彼女たちと一緒に歩いて帰えることもありました。この種の店の終る時間は同じだったようです。月の光の明るい夜、連れ立って帰えるようになり、彼女達から自然に流れ出るのコーラスの美しさ、とてもロマンチック・・素敵です。いつもうっとりとさせられたものです。雨の夜は私のベチャ（三輪車）で送ったこともありました。彼女に熱を上げたわけではないのですが、事務所にはまだ同年代の者が居なかったので、これが憩いと充実の時間でした。

クリスマスの夜

彼女の家のクリスマスに呼ばれたことがあります。母がふるさとのカトリック教会の信者で、私も小学校時代日曜学校の生徒で、信者を志したこともありましたので、喜んで招きに応じました。彼女は長女らしく、両親と兄弟、姉妹と大勢の暮らしのようです。賛美歌「清し・この夜」のマライ語で教えて貰い、皆んな一緒に歌いました。

＊　ミナハサ族・メナド人　ー　今はどう言うか分かりませんが、当時は「オラン・マナド」とは言わず「オラン・ミナハサ」私にはこう呼ぶ方が懐かしいです。 マナドもメナドと言いました。地図で見ると「ミナハサ」とは北セレベスの先端部マナド市、ビトン市を中心とした一帯を言うのですね。当時から「ミナハサ」はインドネシアー「美人の産地」として定評がありました。１９９６年始めてマナドを訪れ、出迎えたガイド嬢の美貌に「なるほど、これぞ本場ミナハサ美人・・」驚いたことがあります。

見る見る増える借金

私の初任給は４３円（ルピア）食費は月１８ルピア、煙草代もいる。見る見る前借りはかさみ、１２月頃には７０ルピアにもなって、課長にこっぴどく叱られ、喫茶店通いを諦めることにしました。

泣く泣く涙の別れ

ない純情な付き合いで終わりました。その夜の２人はただ泣きの涙、信じて貰えるでしょうか。それから１度もこの店に行ったことがないので、彼女も店もその後はどうなったか全く分かりません。

言葉

お陰で、この頃私のマライ語は、日常生活では不自由のない程度に上達していました。「言葉は楽しく使ってこそ覚えられるもの」ここで悟ったのです。「英語だって、こうして教えてくれていたら、きっと覚えられただろうに・・・」戦後思ったもの、でも後の祭でした。私は旧制中学、農学校と就学しましたが、日中戦争が日益しに拡大し米英排撃の風潮が高まり、英語教師は肩身を狭くした頃なので、それを良いことに学ぶことをしないで過ごしたのです。

良き友人たち

新しい事務所　９月、事務所は埠頭に近い中華街の広い建物に移転しました。下が天井の高い倉庫の２階で、長い階段に続くベランダから中華商店街の屋根を見下ろすように見え、その先が大埠頭でした。華系人、インドネシア系男女の職員が働くようになりました。私の仕事は日本人家庭向けの米の販売です。お客に販売の伝票を渡し、倉庫から米を受け取って貰う案内、そんな仕事でした。

サインとタイプライター　販売・出庫伝票に私のサインを書くことになりました。あちらの連中の指導で「Ｋ，ＮａｇａＥ」をオランダ式筆記体で書いたら、仲々面白い。それをずうっと使い続けました。今はパスポートのサインもこれにしています。タイプライターも遊びで習いました。６０の手習いで８４年にワープロに取り付き、それは仮名打ちでしたが、９８年暮れからのパソコンは、いつの間にかアルファベット打ちに変わっていました。５０余年手が覚えていました。

アンボン族の娘

事務所が移転し採用されたのが彼女でした。年は２０歳前後、背は低く小柄、色は黒く、髪の毛は縮れ、アンボン族が一目でわかりました。目は澄んで、とても怜悧に見えました。実際付き合って見たら賢くしっかりして、ズバズバとものを言い、私はしばしばやり込められていました。父親はやはりオランダに近い高官で失職、彼女が働きに出て一家を支えていると言うのです。彼女の発音がいつも鼻に掛かかるのが気になり、それを言うと家の日常会話が使うオランダ語だからと言うのです。「フェネラル・ファンダレン・ウエフ」　オランダ時代の道路の名前、鼻に抜ける音が沢山あり

ました。後に赴任したセンカンで出会ったミナハサ人の医師の家でも、家庭内会話はオランダ語だと多少誇らしげに言っていました。オランダが四百年近く支配した植民地です。その知識階級は仕事上数々の言葉を使い分けなければなりませんでした。何世代も故郷を離れ、長いオランダ人に仕える中で、家庭の会話がオランダ語になることに、最初は驚いたり軽蔑したりしましたが、やむを得ないことではなかったかと思うようになりました。

戦後、インドネシアは独立戦争があり、ジャワ人中心の政府ができました。オランダ人との混血（ハフカース）アンボンなどオランダ色の強い人達は迫害から逃れ、オランダ本土に移住しました。その数は十万人余りと聞きました。彼女が生きていたら、今どこでどうしているでしょう。

北海道弁

自分は気付かなかったけれど、東京弁とは相当違っていたようです。私は千葉弁を「すごい言葉・・」と思っていたのに「お前と話していると、いつも怒鳴られているみたいだ・・」こたえました。考えた末、女性語を使うことにしました。 習い性となり、帰国したら今度は就職先の女性たちに「言葉がおかしい・・」と随分笑われたものです。

カントン（広州）料理目当て

事務所の日直を専ら引き受けた時期があります。昼食の中華料理が目的でした。カントン料理店が隣りでした。スープ、八宝菜、酢豚、焼飯位だったけれど、住宅で出るジャワ風西洋料理が鼻について来ていたからでしょうか。これはたまらなく美味しかったのです。

電柱の見えない街

マカッサルの街の住宅街も、商店街にも表通りから電柱が見えません。始めは気付かなかったのですが、新しい事務所が３階ほどの高さなのでベランダから中華街の屋根を越えた後ろが見え手、ある発見をしました。商点の後ろが空き地で、そこに屋根よりも高い鉄パイプの電柱一本建っています。それから辺りの店に放射状に送電線が出ていたのです。この電柱と隣の区画の間の電線は地下埋設だったのでしょう。 終戦直前の８月１日、私も兵隊として招集され、そこで鉄パイプ電柱に再会しました。電柱を輪切りて迫撃砲にしていたのです。敗戦までの１５日間、それで訓練していました。 あれから半世紀以上経ちますが、日本の街の表通りから電柱を追放する文化が、未だに生まれないのがいつも不思議に思います。

カンピリ婦女子収容所・山地海軍兵曹のこと

海軍がセレベスを占領し、住んで居たオランダ人の男性、女性は別々に収容されました。４７年８月頃まで、婦女子だけマリノに居ましたがその後、スングミナサに近いジェネベラン河畔のカンピリに移されました。（ここを訪れたことはありません）その所長を始めから終わりまで務めたのが山地（路）兵曹でした。 兵曹は会社事務所

に定期的に収容所のお米を仕入れに訪れました。 太った温和な風貌の方、直接にほとんどお話したことは無いのですが、若い私にもいつも穏やかな物腰で接してくれました。その時はそれで終わったのですが、敗戦後南方の収容所の管理担当者が、捕虜・収容者虐待の咎で軍事裁判に掛けられ、時には死刑になるケースも多かったようです。しかし、山地さんも裁判に掛けられた時、カンピリに収容されオランダに帰国していた婦女子達が山地さんの刑免除運動に立上り、それが受け入れられました。こんな事例はカンピリだけでした。

戦争末期、何度となくあったオランダ人婦女子を慰安婦にしようとする動きを「陸軍管轄下のジャワとは違う」と海軍セレベス軍政関係者、山地さん達の尽力でそれを防ぎ止め、日常の処遇も大変人道的に行われていたということもありました。裁判の後、オランダと日本の暖かい交流が始まったとのことです。山地さんは九州の出身、今は亡くなっておられるようです。 戦時下のマカッサルを語るの上で、欠かせない挿話だと思います。

友人交遊

華系人ホンさん

戦前会社支店に勤めた唯一の人、華系ホンさんは、米穀課の会計係、仕事も出来るけれど、遊び人でもありました。彼はミナハサ喫茶通いを禁じられた私を、しばしば引っ張り出して、遊びの仲間に入れてくれました。この人達との付き合いを通じ、インドネシア社会の華系人の重い存在を知りました。役所関係は別として、マカッサルで商工業を行うには華系人の助けを抜きにしては、仕事が出来なかったのです。会社が担当した米の集荷、販売も、戦争前実は華系人が全面的に支配していた仕事なのです。

華系人

同じ北アジア人である日本人と華系人とは、大きな違いがあるように思いました。華系人は何世代たっても「オラン・チョンコ」の意識を失わない、顔付も華系人の面影げを残し続ける何か力があるようです。住宅も中国本土の様式のままに造ります。ぐるりを高い壁にし、入り口は一つ、とても外敵を寄せつけない閉鎖的な構造です。華系人相互の団結、助け合いはとても強固です。でもこの特質がインドネシア華系人を、ことあるごとに、原インドネシア人の憎悪の的になることが多いのです。その原因はインドネシア人にもあるけれど、華系人にも全くないとは言えないようです。同じ華系でも、タイの華系人は経済は勿論、政治の分野で大臣を務める人が何人も出ています。この違いはどうしてでしょう。

日系ダブルス

ミナハサ（マナド）出身の日系ダブルスの青年、私より少し年長でした。彼はマナドで育ち、日本人の父親と戦前日本に引き揚げ、通訳として来た人でした。彼は一見して日本人離れの風貌、挙措動作でした。彼もホン氏同様発展家です。会社本隊が上陸した当初は通訳の用事も多かったのですが、私達が行った頃は、社員は各自大分マライ語がガ使えるようになっていたので、用事が減って手持ち無沙汰のようでした。事

務所が小人数で、彼より年下は私だけだったので、彼とミスターホンはよく夜の遊びに連れ出してくれました。翌年春私が辺地に行き、半年ほどして事務所に戻ったら、支店に彼の姿はありませんでした。いつどこに配置転換されたか、それに私が関心を持ったのは、実は近年マナドに通うようになった最近のことなのです。しかし、今は名前も忘れたし、マナドで聞いて見ても何の手がかりは掴めていません。

吟遊詩人 タン君

タン君はミスターホンの引きで、会社の米倉の庫番になった人でしたが、夜の遊びの方は皆んなの指南役でした。丸々太って、細い目、元々は曲芸の芸人だったそうです。３０代前半、トンボ返りなど得意中の得意、美事なものでした。ギターを弾くのにと爪を長く伸ばし大切にしていました。月の明るく照り映える夜、ティガ・ローダー（三輪車）に、何人も乗って、二階建て住宅街などに繰り出しました。タン君の弾くギター「恋の歌」の調べがゆっくり流れます。二階の女性が声をかけてくれました。「吟遊詩人」と言う言葉を知った時「そうだ、彼は正しくそれだった！」と思ったものです。

パッサル・マラム

彼の本番の芸を見たことがあります。パッサル・マラム（夜の市・今も開かれているでしょうか。収穫の終わった時期、小さな博覧会に似た行事があって、この中で賭博が公認で行われるのです）年に一度のお祭りです。 彼は主催者に招かれ芸人の一人になります。私達は彼の演技時間に間近かに陣取りました。芸は自転車のハンドルに跨り、足で前輪を操作して立ち続け、ギターを弾きながら、幾つも歌を歌うのです。素晴らしい芸でした。歌が終りお客の拍手喝采を浴び、プルセン（チップ）を貰うニコニコ顔の彼の姿は今も目に浮かんで来ます。

サヤ・チョンコ ！！

あちらの人達だけが入れる、サービス女性もいる小さなバーがあちこちにありました。いつもの良友連が揃って出かけました。こんな時私は、昼の半袖、半ズボンスタイルから、取っておきの白上下の背広を着込んでお供しました。行って見ると格別のことのない店です。酒も椰子酒、皆でワイワイやっていました。私は当時酒はまだ全然飲めません。 突然警察隊（憲兵）が２、３人入って来ました。日本人が居るか臨検に来たのです。 居合わせた人間に順番に懐中電燈を突き付けます。この頃は、マライ語は板に付いています。あわてず眩しそうに「サヤ・ティオンコ・トゥアン＝私は中国人・・・・」 無事でした。連中は私を顔つき、服装から華系人と認めたのです。 何故か華系人は、何世代経ても日本人より色の白い人が多い。私は南方に行く前、北海道で冬中外に出なかったし、マカッサルでも室内勤務ばかりなので日焼けしていないのです。

海軍バット（精神棒）

一番暑い日中岸壁の倉庫の辺りを歩いていて、その辺の施設に立っていた海兵隊の歩哨（門番）に敬礼をしなかったらしく、掴まって倉庫のかげに連れていかれ、尻にバッ

トを食わされました。（何か大切な物を保管する倉庫でもあったのでしょう・・・）バッタを喰うのは船の中に続いて二回目です。でも叩きかたが軽かったので、寝るまでには至りませんでした。海兵隊の歩哨も年は私と大して変わらない、一見して若くて生意気に見えて腹がたったのでしょう。その後もう一度何かでバッタを喰った気がするのですが、どこでだったか忘れました。

トゥアン と言う言葉

これは今は死語らしく、旅していても全く聞こえて来ません。人と人の関係の差別語になったか、五十年の年月を感じました。

学んだもの

この時期に得たものは沢山あります。「必要」と言うことが、最良の先生になったのでしょう。 外国語を学ぶにはどうしたら良いか・・インドネシアには様々の人達がいることがわかり・・その人達との付き合いを数重ねながら、いわれの無いコンプレックスを段々無くして行きました。そして、このインドネシアで生きる自信が次第に芽生えて行ったように思います。

モロタイ島から爆撃

少し後のことになりますが、１９４４年昭和１９年に入って、ハルマヘラの北モロタイ島にアメリカ空軍基地が設定され、そこからマカッサルへのＢ２４爆撃機の爆撃定期便が始まりました。思い出の喫茶店、会社の事務所のある中華街１帯は、真っ先に攻撃目標になって、早い時期に廃虚化、瓦礫の山でした。私は当時マロスにいたので、爆撃の実状は知らずに過ごしました。 戦勝後のことを考えてか、住宅地帯は爆撃目標から外していたようです。

支店社員の推移

あの時期，後が続いていたのだろうか？ １９４３年昭和１８年４月１日現在の社員名簿があります。 支店長以下嘱託１名、書記５名、書記補６名、見習６名、傭９名合計２８名でした。これだけの人で支店、パレパレ・センカン・ワタンポネ・ソッペンに米穀関連の店を出し、何万トンもの米を集め、マカッサルに送り、市民に配給し、前線にも送っていたのです。その他に野菜直営農場、委託契約栽培事業もやって居ました。勿論とても手不足だったでしょう。名簿を見ると私は傭の下から３番目、２番目は一緒に来た年下の人です。若い人間がこの一年に全然増えて居ません。支店が本社に要員の増強を求めなかったとは思えません。本社から要員をきちんと送り出して居たら、増えない理由はただ一つ、日本を出発しマカッサルに到達しない不幸な人達が、相当数いたことになります。４３年１１月、新たに来た人を知っています。その頃まで、増員は届かなかったのでは無いでしょうか。

引き揚げ後

１９６３年昭和３８年７月２８日現在、日本引き揚げ１８年後のマカッサル支店所属旧社員名簿もあります。全国に１０８人帰ったことになっています。この人のほぼ半数は１９４４年から４５年にかけ、パプアニューギニア、アンボン、ハルマヘラなど東部方面から、マカッサルに苦難の逃避行の末、辿り着いた人達ではなかったかと思うのです。１９４４年暮れ私の駐在したマロスに配置されたＳ君は、アメリカ機の爆撃に曝されたハルマヘラ島を逃れ、セレベス島の北から南へ歩き通し（千五百キロ余り）縦断、４５年３月に来たＲさんはニューギニアからアンボンを経て、海路マカッサルに向い、港を目の前に船が撃沈、漂流、救助された人でした。

センカンへ赴任

１９４３年昭和１８年春、南セレベスの丁度真中のるセンカンに駐在していたＹ主任に誘われ、そちらに赴任しました。始めての辺地勤務が始まったのです。この頃マカッサルに泣き別れする人はもう誰もいませんでした。

センカン　１９４３年になりました。マカッサル事業所勤務もそろそろ飽きて来た頃です。センカンに駐在の安永さんから「一緒にセンカンに行かないか・・」声をかけられました。安永さんはセンカン駐在主任、台湾籍、戦前から南洋貿易会社支店に勤務、マライ語は達者、セレベスの事情に詳しい人でした。　「ぜひ連れていって下さい」飛び付きました。当時、私は東はマリノ高原、北はセゲリーまでしか行ったことがなく、田舎で働いてみたいと願っていたのです。センカンは南セレベスの丁度真中辺り、テンペ湖畔にあり、ワジョ分県行政の中心地です。センカンへ行くには、マカッサルから北上、マロスで右折（バンティモロンの滝を左に）チャンバ渓谷を上り詰め、ワタンポネの領域に入り北上、ポンパヌアからセンカンに至ります。距離おおよそ２００キロ、マロス～ポンパヌア間は未舗装でしたが、行き交う車は皆無、路盤は良く整備されていました。パレパレ経由は全部舗装でしたが、４～５時間かかりました。安永さんの車は支店にも無かった「フオード」乗用流線型です。乗用車の快適なドライブ、生まれて始めての経験、大感激でした。

セカンでの宿舎は、街の東側、山の上のパッサングラハン（公共の宿泊所）です。会社の事務所も住宅もまだ決ませんでした。宿には他に綿花栽培調査の２人連れが滞在していました。

ラオチュウ

安永さんの晩酌の相手をしました。彼は寝室に老酎（ラォチュウ）の大きな壷を数本たくわえていて、テンペ湖で採れる塩乾魚のカラ揚げを肴に一杯飲むのが常でした。私もおしょうばんに預かりました。でも、老酎は余りにもアルコール分が強く、水割りの知恵もなかったので、ただ辛いだけ、味は分からずじまい、ラォチュウでは酒好きになれませんでした。

米の集荷

会社の仕事は米の集荷です。戦前南セレベスの米は、集荷、精米、輸送、販売共に全面的に華系人の手にありました。それを接収する形で会社の仕事が行われたのです。センカンにも大きな華系の米商がいましたが、安永さんはそれを引き継ぎいよいよ自前の仕事を始めた所だったようです。

ラジャー　センカンの住民はブギス族、ブギス語を話します。ワジョ分県は、全体を統括する酋長（ラジャー）は世襲ではなく、郡長間の選挙で選ばれていたようです。こういう自治領は珍しいらしい。一度ラジャー出席の「郡長＝今は何と呼ぶのか知りません」会議に出たことがあります。日本の行政官「コントローラー・分県監理官」が赴任していない頃です。会場はラジャーの屋敷です。そこは国道からテンペ湖に望む一段低い平地に広いサッカーコートがあり、右がラジャーの屋敷、左の一段上にコントローラーの事務所兼住宅がありました。ラジャー屋敷の大広間に、ラジャーを真中にして左右に群長たちが居並びます。私達日本人はラジャーのすぐ隣の椅子に座ります。郡長は３～４０人いて、厳格な身分・序列が決まっているらしく、椅子に座る人、床に座る人と別れていました。ここで「膝行」を始めて見ました。下級の郡長がラジャーに握手を求める時、まず郡長はラジャーの５～６ｍ前まで小腰を屈めて進みます。　右片膝を立て、右手を前に伸ばし、腕肘に左の手の平を隠し、右足を進め、左足をすべらせて寄せ、ラジャーの握手を貰います。これが当時の最高の儀礼だったのでしょう。私は左手をかくし右手をさしのべ握手を求められたことはありましたが、膝行された経験はありません。

土地と階級

ソッペンのラジャー１族の１人に聞いたことがあります。見晴らしの良い高台に上がった時のことです。彼は眼下の広がる田畑を眺めながら「ソッペンでは田畑の４分の１は酋長一族が所有、４分の１は郡長１族、更に４分の１は部落長（カパラ・カンポン）１族、残り４分の１だけが一般庶民の所有地だが、これも金持ちの商人の持物になっている」と教えてくれました。結局耕作農民は、土地を持たない小作民でこれで身分、階級も決まっていたようです。

大酋長　南セレベスには、傑出した３つの大酋長家がありました。　第１はマカッサル郊外のスング・ミナサに住むゴア酋長、この酋長は明治の末期まで、オランダ支配に抵抗、抗争を続けたそうです。私はセンカン勤務の後、短期間勤務したスング・ミナサで、ゴア・ラジャーに何度かお会いしたことがあります。身体の大きい威厳のあるご老人でした。　第２は、ジャランの南方ワタン・ポネのボネ酋長、　第３は、ジャランの北パロポのルー酋長家です。これらの名家はそれぞれ婚姻関係で結ばれているそうでした。酋長の旅行はアメリカ製９人乗り大型乗用車、助手席に窓外に槍を突き出した従者が座り、後座席は向い合わせの席に、小姓が噛み煙草の箱や痰壷を持ち、その隣りに 侍従が座っていました。スングミナサに駐在した時、ゴア・ラジャーの車を半日私１人で乗り回したことがあります。たしか「行方不明になった兵隊を捜せ」と言うことでしたが、結局ただ管内を走り回っただけでしたが、バスの後部座席に座って前を見ている感じ、とても良い気分でした。従者の人達はサロンの下に刃が蛇のようにくねった長さ４、５０ｃｍのクリス（短剣）をさしていました。南セレベスには沢山自治領があって、世襲のラジャー（酋長）が、オランダのコントローラ

の下で統治する形をとっていました。ラジャーのいる自治領で私の行ったのは、ラッパン、ピンラン、ワタン・ソッペンなどがあります。ピンランのラジャーは女性でした。最終に赴任したマロスは、ラジャーのいない珍しい分県でした。

ジャラン　ｊａｌａｎｇ

一通りセンカン（ワヂョ）管内を車であるきました。３月が過ぎ、１人海岸のジャランに赴任することになりました。ジャランはセンカンの北、パリアから枝道に入り南下、ドゥッピンから東海岸に向って海に突き当たった港町で、センカンからは五十キロほど離れた処です。インドネシア語で「ｊａｌａｎ」は道ですが、ここのジャランはｇが付いています。ブギス語で別の意味があるかも知れません。人口は分からないけれど、集落の戸数は５～６０戸、４年制の小学校もあり、日本の村程度に見えました。この地方２０キロの範囲の中心地、パッサル（市場）があり、ここに米が集まって来るのです。

集落の住民は全てブギス人、自分達をオラン・ウギ、ウギ人と発音していました。華系人の銀細工の店がドゥッピンに一軒ありました。ブギス族はインドネシアの中で「勇敢な航海者」として知られていて、この村にも、シンガポールやジャワへ航海し、商売をやっている商人が沢山いました。船は帆船（プラウ）、平時だとこの辺りの米を仕入れ、先に東の島、ケンダリー、アンボン、パプアニューギニア、タルナテなどに運び、米と引替えに香料、コプラ　（椰子の中実）珍しい鳥、貝などを仕入れ、ジャワ、シンガポールに運び、これを衣類、陶器等の工業製品に替え持ち帰える、こんな繰返しの商売だったようです。

街の高台の辺りにそんな商人が多く住んでいて、１度招待を受けたことがあります。宴会は昼、野外の木の下で始まりました。 イスラム教徒は一切お酒抜きです。出された御馳走の一つ一つは忘れたけれど、黄色に煮込んだ鶏の足、スープに香料の丁字を浮かび、香味が強くそれに唐辛子の辛味で閉口し、そこそこに引き揚げたことを覚えています。

ハッジ

イスラム圏で白い帽子をかぶった人をよく見かけます。ハッジです。ハッジはアラビア・メッカ巡礼を果たした人の尊称です。あの頃ですから、メッカ巡礼は船便で、莫大なお金と時間と困難を伴った旅だったでしょう。ジャランの商人にはハッジが沢山いました。

足の小さい郡長

頻繁に接触した相手は郡長でした。彼の管轄の広さ、人口は日本の村位の規模だから、むしろ村長とよんだ方がぴったりだし、そんな風貌の人でした。３５歳、ひょろっと背が高く痩せてかん高い声を出す、一寸いい男でした。父親が亡くなり後を継いだのが８ケ月前、上級小学校（６年制）を出た１５歳の弟がいて、彼は来年マカッサルの中学に入りたいと言っていました。役場は８畳間ほどの部屋２つ、１５畳の会議室、そこに群長の親族で３０代の若者　５、６人いて事務をやっています。安永さんにい

きなりここに置いて行かれ何も分からない私に、住居、使用人、食事の段取りなどまめまめしく世話をしてくれました。

「我々郡長階級の身体の特徴は、足の小さいこと、これを見れば見分けが付く」郡長だって普通人と同じに成長した筈なのに、彼なりの階級意識の現れだったかもしれません。たしかに群長の足は小さかったけれど、後に各地で沢山の郡長に出会ったが、そんな自慢話は一度も聞いたことはありません。ジャラン一般の人は靴をはく習慣がありません。足指は伸びるだけ伸び手指のように長く、自由に拡げたり地上のものを足指でつまんだりできました。

「笑い話」 罪人に靴を履かせて働かすとすぐ「靴ずれ」を起し、それが一番辛い怖い刑罰になるとのこと・・実際には靴は大変な貴重品です。汚れたらもったいないでしょう。

郡長の権限

ジャランは自治領ワジョ国に属し、酋長の下の職種、でもとても大きな権限を持っています。

①行政権 税金を決め、取り立てる。道路修理の使役に人を動員する。 週一度開かれるパッサル（市場）の管理、監督、使用料を徴収します。

②警察権、裁判権を持ち、部下の巡査が三、四人います。普段は群長の使用人のように使っています。事件が起きると軽いものは群長が裁判、重いものはワジョ酋長に身柄を送ります。こんな時巡査は犯人の手をしばり、五十キロの道を共々歩いて送るのです。もちろん巡査も裸足です。

③道路の補修、公の仕事に住民を動員できる。 ④郡長所有の田畑の作業に住民を使うことができる。 郡長は年３日労働の決めを勝手に５日に伸ばすことがあるそうです。 郡長も巡査も洋服は着ていましたが、中味は明治以前の殿様、家老、家来、庄屋、町人、百姓、階級制度が生きていたのです。

仕事

ジャランは港街、ブギス帆船交易の拠点となっていました。パッサル（市場）には、周辺から米が集まります。私はこれを買い付け、船で大都市マカッサルに送ることだったはずですが、実際に買い付けしたことも、市場に立った記憶もありません。きっと安永さんの段取りで現地の誰かが全部やっていたのでしょうか。監督にならない監督でした。も、オートバイ１台が預けられ、多い日には１日１３０キロも走ったと手紙にあるけれど、どこへ行ったのか記憶がありません。運転は独り覚えです。免許制度もまだありませんでした。

６月、２７キロ先のパリアで巡回映画を見ました。ニュース、文化映画（都市、季節、スキー、愛国の花）など、少し里心がつき、終わって夜道２７キロを帰るのが厭になったと書いています。

住まい

海に向かう村の大通りの、左にパッサル、小学校、右に郡長の役所、警察・留置所（トロンコ）その隣りに高床の「ルマ・サハバット（友の家）」がありました。村の来客の泊める公共の建物ですが、そこが一時私の住いになりました。ラジャーのいる街には大抵「パッサングラハン・公共宿泊施設」があり、コックも常時いて快適な滞在ができました。「ルマサハバット」は六帖の部屋が２つ、その１つにベッドが２つぽつんとあるきり、後ろにトイレと水浴び場がありましたが、長いこと使っていないので、干乾びて いました。管理は郡長の役目、寝具一式、食器、食卓を持込み一応住めるようになりました。

１９４３年（昭和１８年）中心地センカンでさえ常住の日本人は私達だけ、そこからさらに５０ｋｍ先に住むのは、今考えると相当の冒険だったのです。度胸は良い私でも、大分心細かったに違いありません。気負った手紙を何通も書いています。小さな石油ランプでは暗いので、ペトロマックス（灯油を霧状にしマントルを使 う）を探しました。百ワットの明るさが出ますが、欠点は小さくできないので寝る時は消さなければなりません。消すと暗さが迫ってもっと気味が悪くなりました。

老僕、ジョンゴス・トゥア

私の食事、洗濯など身の回りをさせると、郡長は一人の老人を連れてきました。昔オランダ人に仕えたと言うふれこみでしたが、郡長の失業対策にやられた感じでした。先ずほとんどマライ語が話せない、聞けわけられない。ブギス語・・しかもこの地方の方言しか話せないらしい。私だってセレベスまだ半年余り、マレー語も不十分、そのマライ語も彼には外国語、ほとほと疲れました。それに彼は、南方に多い「ふたなり（両性）」らしく、身体は小さく痩せてナヨナヨして、口は「シリ」を噛んで真っ赤、昔は髪も長かったらしいが、今は短い髪を色あせたソンコ（イスラムの黒い帽子）の下に押し込んでいます。年齢は４０代でしょうか。用事ができると、私の膝下に１々すがりつくようににじり寄り「トゥアーン・旦那さん」猫のような黄色い声で呼かけて、ブギス言葉で話す。彼が努めれば努めるほど、気色が悪い・・

いまいましくって仕方がないけれど、郡長に文句を云っても「今適任者は彼しかいない」取り合ってくれません。「そんなことはあるもんか・・」思ったけれど、当時の私にははどうにも手の出し様がありません。結局ジャラン滞在の間中イライラしっ放しでした。郡長が何故「これが適任・・」としたのか、後になって少し推察できました。

食事

最大の悩みは食事でした。朝はコーヒーと卵位で済ましました。お米の食味と炊き方仕事はここの米の集荷ですが、この地方は地勢の関係から雨量が少ない乾燥地帯で、地味も悪いせいか南セレベスでは最低の「バッカ」種しかとれません。炊くとバラバラ、粘りがなく、黒く小粒で、味わいが無く、食欲は良い方の私でも 食べられたものでありません。ここでは右手の指で食べるので、手にくっつかないように、炊いている途中で重湯を捨て、わざとばらばらに仕上げるのでしょうけれども・。 魚は毎

食出ましたが、骨付き、皮の所々に切れ目を入れ、石の臼で摺った真っ赤な南蛮（唐辛子）を塗りつけ、椰子油で「から上げ」・・

魚は変わっても料理も同じなら味は同じ、北海道の魚と違いこうでもしなければ身が締まらないのかも知れませんけれど・・。

魚の塩気と南蛮の辛味、椰子油の匂い（特有・・・なれるのにこの後半年程かかった）の渾然一体の代物、醤油が欲しいと思いました。スープは、ただ辛かった記憶だけ、野菜は食べたかどうか覚えていません。日が経つにつれ、魚は南蛮の少ない処を少しつまむ程度、スープは塩味と辛味を減らし、御飯にかけて、流し込む食べ方を覚えました。下僕は食事付きの雇いですから、毎回大半を余す私の食事は老僕の味覚にあっているのですから、美味しく戴いていたのでしょう。

歌の会

私の日々の困惑を察したか、郡長は１夜学校の先生を中心に４、５人の若者を集め、歌の会を設けました。お酒はもちろん出てきません。「ルマ・ソウバット」前の席で、私の覚えた歌はインドネシアの愛唱歌、皆んなでそれを歌い、新しい歌をいくつか教えて貰いました。男の子がギターを牽きました。「ディ・チャハヤ・ブラン」「テンペ湖にて」など、恋の歌です。若い時に仕入れた記憶は長持ちします。この夜の歌は今もどうにか歌えるし、歌うとその夜の情景が思い出されます。

集まりに２人女の先生が来てくれましたが、ここでは特別のことだったようです。普通若い女性は家族以外の人に顔を見せません。道で会うとすばやくサロンで顔をかくします。イスラムの戒律と、外国人になれていないことのようです。郡長には始めての若い外国人の私を警戒し、超安全で物すごい老僕を張付けたのはこのせいだったかと思いました。

日本語講座

ジャラン始めての日本人と言うので、日本語講座となったのですが、結局「文化放談」みたいになりました。週３回毎回１時間はしゃべりまくる・・私のマライ語の勉強に役立ちました。何を話したかこれは覚えていません。

水の話　ジャランに行ったのは、ちょうど乾期でした。何ケ月も雨が無い。ジャランは水のない街になります。４キロ離れた処から運ぶのだそうで、１缶いくらの値段ができていました。暑い時生ぬるい水を飲むのは、情けないものです。

カマルクチル（トイレ）のビール瓶

オートバイに乗るせいか野菜が少ないからか痔になりました。薬もなし、ビール瓶の水を使うことにしました。その効果抜群、痔は簡単に治りました。それからセレベスにいる間ビール瓶のお世話になりました。

ポットン・パディ

小作料は、稲が収穫期になると田１枚毎に地主と小作が立毛まま２つに分け、地主、小作それぞれに稲の穂先を摘み（ポットンパディ・稲切り）竹の皮で束にし、３角の笠の上に載せ家に運びます。稲はパラパラ落ちない種類なので、天井裏に束のまま蓄えます。ポットン・パディは女性の仕事、摘み賃も稲で貰います。束の重さは地方毎にほぼ一定し、１束いくらとモミで取引されることもあります。

脱穀・精米（トゥンボック・パディ＝稲を搗く）

脱穀は、始め太い木に穿った矩形の４角な「きつ」に、稲穂をいれ手で掴める程の太さの長い竹杵で搗いて脱穀する。モミになったら同じ木の片方に穿ってあるもう１つの小さな臼状の穴で、長い重い木の杵で搗いて仕上げます。搗き上がった米は、特別な椰子の葉で編んだ袋に入れます。口を縫うひもも、同じ椰子から作ります。月の明るい夜は遅くまで、集落のあちこちから、ポン・ポン乾いた調子に乗ったトゥンボック（稲を搗く）の音が聞こえ、豊かさが伝わって来ました。

港・マングローブ

街外れの海岸から沖合にかけ、４キロもの遠浅の海にマングローブの密林が出来ています。マングローブは根が「たこ」の足のように水中に伸び、海水でも塩分を排除して成長する南国特有の樹種です。幹は４～５メートルの高さになり、硬く、良い木炭の材料で製品ははるばるマカッサルまで送られていました。マングローブの林の間に、幅１５メートルほどの水路が開け、満潮時に拡がった水路を使って大きな外洋向け交易用の帆船が出入りします。 船の帆柱が高いので、マングローブの上を吹き抜ける風を受け移動します。風が無ければ竿で押します。干潮時水路は殆ど空になるので、少し広い処で、ゴロリ横になって満潮を待っています。大きな帆船（プラウ）には、米を３～４０トン積み込めるそうです。小さい５～６人乗りのカヌーは干潮時でも往来できます。場所によって底がつかえ、１人２人が降りて押出すこともありました。

沖荷役

私の仕事には、ジャランで買い付けた米を大型プラウに積み込みマカッサルに送ること、日本の機帆船（確か第１虎丸と云い、戦前からこの辺の交易航海をした）が来ると、地元のプラウを艀（はしけ）に仕立て、沖荷役で積み込む、その手配がありました。ジャランにいた間に何度か沖の荷役作業に立会いました。船酔いしない体質だと分かっていたので、その度に張り切って荷役の連中と小さなプラウで沖に出かけました。マングローブの狭い通路を通り抜け、広い海原に出て少し沖合に停泊している「第１虎丸」に向います。海には風もあり波も出ています。虎丸は随分大きな船に見えました。１日海の上にいました。多分昼は「第一虎丸」の日本式の食事を御馳走になったのではないでしょうか。 日本へ送った手紙には３、４回機会があったと書いています。

水上部落

マングローブの水路の途中に、１０軒ばかりの水上部落がありました。この人たちはマングローブの炭を焼いたり、林の中の魚を捕って暮らしていました。泥を積んで満潮でも少し地面が出るまで盛り上げ、石の台を置き、鉄木（カユ・ベッシィ）の柱を立て、高床の家を建てました。　普通の陸地なら１０メートルも飛び回るインドネシアの鶏も狭い地面をうろうろするだけでした。干潮の時、床下で米を搗いていました。用をたすのは、家から少し突出した処ですまします。この部落では、街に行くのはもちろん、隣の家に行くのさえ小舟が足になります。子供達は長さ２メートルほどの可愛いい丸木舟を軽快に扱って往来していました。この住人が、岡と同じブギス人か、違う人達か聞くのを忘れました。海の帰り、日が落ち暗くなります。満潮に乗りプラウはこの部落にさしかかります。各家々からキラキラと灯火が洩れ、水面に映し出します。その灯火をかき乱しながら、私達の５、６人のこぎ手のかいが、舟ばたをコトーンコトーン、リズム音を刻みつつ漕ぎ進みます。船の後に座って、水面を見、暮れて行く空を見ていたら、毎日のひどい食事の不満も消えて、心地良い１時でした。漕ぎ手から歌が出ましたがどんな歌だったでしょう。

新居

街からちょっと離れた高台に宿舎を建てていました。床下２ｍの高床、ニッパの屋根、竹の家です。応接ルーム・寝室・食堂・水浴室・台所・使用人室・トイレなど、窓から見ると田圃がづうっと続き、彼方に山がかすんで見えました。水牛はこないけれど、山羊、羊が家の回りの草を食べています。山羊は乳肉、羊は 肉用です。

別れ

ジャランとの別れは意外に早く来ました。原因は私にありました。殺風景な「ルマ・サハバット」の住居環境を整えようと、無断で壁飾りや食器などを、交易船（プラウ）に頼んで、マカッサルから取り寄せ、飾り立て良い気分でいましたら、経済観念の強い「ボス安永」が、カンカンになって、即刻ジャラン引揚げを命じたのです。私もジャランに深いなじみも出来てはいなかったし、辛い料理には閉口していたから、内心ほっとしたのではないでしょうか。ただ、初めての単身赴任、思い掛けない辺境で体験した数々のカルチャーショック、滞在は６～７ケ月の短期間でしたが、思い出の多い土地になりました。

（注）ジャラン滞在の頃、日付け入りの手紙が出せ、何回も書き送りました。１９５２年に「思い出のジャランメモ」を書いています。

「追記」　　１９９３年６月、昔の同僚６人がセレベスを訪れました。愛媛の井石坦さんは私より少し若い人で、この後センカンとジャランに駐在していましたが、旅の感想を寄せてくれました。『センカンは、昔のままの処もある。私達の南洋興発ＮＫＫの事務所は、大変古びて危ない状態のせいか無人だが、外見は昔通りだった。なつかしく、涙が出そうだった。住んで居た家は無くなり、イスラムの大きなモスクが建っていた。偶然昔を知っている人に会い、話を聞いたが、私の知人は皆死んだ様子だ。昔有った森は無く、田や畑が次ぎの町まで続いていた。もっと驚いたのは、海岸から何キロも繁っていたマングローブの林は、きれいに切り倒され、１本も見つける事が出来ない。跡は「うなぎ」や、「えび」の養殖場になっているとのことだ』

第９話　センカンからスングミナサへ

ＤＫＷ ジャラン勤務を解かれ、センカンに戻ってからの２カ月ほど、オートバイであちこちの出先へ行く用を云いつけられました。オートバイはＤＫＷ（ディカーウェイ）ドイツ製、今思えば１２５ｃｃほどのものだったでしょう。でも調子が良くてパレパレからラッパンに向かう丘の直線道路では９４ｋｍを出しました。運転を誰かに習ったか覚えはありません。当時は行き交う車は皆無で、いつも道の真中を我が物顔で走っていました。

センカンには電話がなく、電報があったかどうか、記憶はありません。急ぎの用は私のオートバイが重宝されたのでしょう。郵便業務は機能が回復、センカン滞在の頃何通も国に手紙を送っていますが、発信月日、発信地の住所を書いて良いことになっていました。（上陸当初の住所は「呉郵便局気付セ４５セ４２」を使い、切手はなく「軍事郵便・検閲済み」とあります）

ワタンソッペン

センカンの隣りのソッペン分店は、南西４０キロの処でした。安田さんが主任として赴任していました。私の行った時にはもう住宅を構えていて、そこに何日間か泊まりました。安田さんは南洋群島の経歴は長い４０代の方でしたが、マライ語はこれからでした。でも歳の功かもう仕事を始めていました。

ここへオートバイで行く途中雨にあい、顔を直撃され走られなくなって民家に避難したことがありました。しかしその後防空眼鏡はついに入手できませんでした。ソッペンは水も豊か、緑の多い落ち着いた街です。管内も肥沃な水田地帯が開けていました。前任地ジャランのような乾燥し、荒漠とした処は見当らないようでした。

ホールドアップ

１９４５年９月、私は現地招集で兵隊生活をしていましたが、敗戦後次第に規律の乱れ出した兵舎生活を敬遠、会社に呼び戻して貰いました。 マカッサル・マロス・パレパレと転々とした後、当時ソッペン郊外にに出来た「居留民収容所」に入って過ごしました。そこへカウボーイハットを斜めにかぶったオーストラリア兵が２度も襲来、自動小銃を突き付け、めぼしいものを片っはしから召しあげるのには閉口です。缶詰、中国酒などがやられました。

１１月スリリに南セレベスの居留民が入る収容所ができ、そちらに合流することになり、自治生活が始まりました。スリリにはそんな兵隊の来襲はありませんでした。

ソッペン再訪

戦後２度目、１９９６年のセレベス訪問の折、タナ・トラジャの帰り途、連れに頼んで、ラッパンからまっすぐ南下ソッペンに寄りました。 センカンに行くのは無理なら、せめてソッペンにはと思ったのです。 ソッペンは当時のたたずまいが残り、好

ましい街でした。ルママカン・スダップで遅い昼食をとりました。ナシゴーレンが美味しかった。邦人の「寄せ書き帖」がありました。 その時知ったのですが、ソッペンは南セレベスでは珍しいキリスト教徒（カトリック）の多い処になっていて、昔オランダのコントローラ（監督官）のいた丘の上に、今はキリスト教会が立っているそうです。

センカンと阿南司令官

戦争末期、モロタイ、ハルマヘラ方面にいた陸軍は、アメリカ軍の反攻によりセレベス島に撤退しましたが、食糧生産の乏しいマナドなどの北部を避け、全員殆ど徒歩でセレベス島中部に撤退しました。マリンプンに飛行場を造り、トラジャからセンカンにかけ、兵を展開させたようです。司令部はセンカンに設けられ、司令官は阿南将軍でした。この方は戦争末期最後の陸軍大臣となり、敗戦が決まった後自決したことで知られています。もちろん当時 現地ではこんな事情は一切知らされず、戦後随分後になってセンカンとの縁も知りました。

パレパレ

会社は船着場近く、東京出身の小池さんが主任、ジャワで働いていた吉川さん方がスマートな事務所兼宿舎を構えていました。前の海は静かで向かいに緑濃い島が見えて美しい港でした。私が呼ばれたのはピンランのスリリ（後の居留民収容所）に野菜の直営農場を作るのに担当していた五木田君が入院したので、当分代わりをやれと言うことです。五木田君は４２年７月同じ船で来た仲間です。パレパレの街の印象はほとんどありません。ぶらつくほど滞在しなかったのでしょう。

壁の花

パレパレ滞在中、宿舎を会場にダンスパーティの催しがありました。日本人は私達５、６人、後は従業員や家族など３０人ほどの会合でした。ダンスはマカッサル上陸当時に少しやったのですが、残念ながら覚えきれないでいました。次々と出て踊ります。誘われもしました。でもついに壁の花で終わり、内心とても悔しい思いでした。その時見た小学校低学年の姉と弟の踊りの楽しくきれいな姿に感動した覚えがあります。音楽は生バンド演奏だったようです。

事故

パレパレの郊外でバイクで自転車を引っかけた事があります。幸い相手に怪我はありませんでしたが、市役所の役人だったのでその場の示談とはならず、市長の牧野さん（三井物産出身）の処へ出向き、謝って勘弁して貰いました。

ピンラン

パレパレの北２０キロにある街です。やはり緑に包まれたきれな処でした。女性のラジャー（首長）にお会いしまた。４０代のきれいな人、サロン・バジュ姿でした。泊まったのはラジャー邸の向いにあったパッサングラハンです。

清水組の若い建築技師と知り合いました。製綿工場を建てるとのこと、ピンランの西の郊外現場を見に行きました。パッサングラハンの食事はセンカンより大分上手、始めてポテトチップスを知りま した。美味しい・・じゃがいも主産地の北海道で、当時はまだその調理法は普及していなかったのです。

スリリ

街から農道を１０キロほど東に行った処に農場がありました。辺りは一面椰子林、近所に人家は見当りません。道に並行した草ぼうぼう数ヘクタールの荒れ地、そこを耕して畑にするのが命ぜられた仕事です。毎朝オートバイで通いました。農夫が何人か来て開墾作業をしていますが、なんとものどかな進行ぶり、さっぱり捗っていません。何日後かに水牛を手配、今度は少し仕事が見えて来ました。農場の入り口に丸太を立てて「スリリ農場」の看板を掛けました。そんなことを何日やっていたのでしょうか。そこへ「すぐマカッサルに戻るように」指示がありました。１９４３年６、７月のことでしょう。それから２年後の１９４５年１１月このスリ リが「セレベス居留民収容所」になり、私もそこに戻るとは夢にも思わないことでした。（ここの滞在は多分短時日の滞在だったのでしょう。この農場の先何キロか行くと、温泉の湧く処があり、さらにその先には、戦後に１万人前後の陸海軍兵士の収容所の出来たマリンプン大平原＝砂漠があるのですがそれを知らずに過ごしたのです）

給料と費用

こうしてあちこちを移動、宿に泊まり、どこかで昼飯も食べたりしていた筈なのに、その費用をどうしていたのかまるで記憶がないのです。タバコはのんだけれど、酒は知らなかったし、色気もまだ無かったのでしょう。生活費用はそんなにかからなかったと思いますが、自動巻き時計を売りつけられ、とても欲しかったけれど買えなかった覚えがありますから、余り余裕はなかったようです。

スングミナサ・骨は拾ってやる！！ 泳いで帰るのなら・・

４３年６月、私は満２０歳になりました。日本にいたら「徴兵検査＝兵隊になるための身体検査」を受ける年齢です。どうしたら良いか。一緒の船千早丸で来た同年の石井君と相談しました。「内地にどうしても帰らねばならないか・・」この頃には、来る船、戻る船の多くが、途中で撃沈されていると耳にするようになっていました。もともとは兵隊になりたくない２人・・でもそう表には言われない。恐る、恐るマカッサルの和田米穀課長に申し出ました。「私たちは徴兵検査の年なので、帰らねばならないのですが・・・」 課長は言下に、私達の本心を見透かしたように「泳いで帰るのならいいよ・・」それで話は終わり・・ホッと安心したことを覚えています。

「スングミナサ赴任」

７月にはマカッサルに戻っていました。乾期の最中です。マカッサル市近くで分店の無かったのはスングミナサだけでした。それと言うのもマロス・パンカジェネなど北の米作地帯に比べ、スングミナサからタカラル辺りは地形の関係からか、雨量は少なく水利の便も悪かったせいか、米の低位生産地帯でしたから、米集荷は期待出来ないので放って置かれたのでしょう。しかし会社は南セレベスの米の需給統制機間でもあったわけですから、軍需の外に民需用も供給する任務もありましたこの頃分県監理官（コントローラー）が配置され、そちらから分店設置の要請が強くあったのだろうと思います。その分店新設の任務を私に与えたのです。セレベス滞在は１年になっていましたが、２０歳になったばかり、他に適当な人がいなかったのでしょう。指示したのは和田米穀課長です。「大変だろうが自分の思い通りやって見ろ・・。失敗してもいい、骨は俺がいつでも拾ってやる・・」云われて勇躍飛び出しました。この時の言葉は強く心に刻まれ、後に私が後輩に同じ言葉で新しい仕事に送りだしたことがあります。

マカッサルからスングミナサに入ると、街の入り口にちょっとした商店街があり、その先道路の左に大きな並木に囲まれたサッカーコート、それを前にゴア首長（ラジャー）の大きな木造の屋敷があり、道路の右に広い緑地の中に監理官事務所・公宅がありました。（マリノに行く道は、首長邸の奥にバイバスで設けられていました）当面は分県監理官官舎に同宿させてくれました。破格なことでした。彼の厚意もあったのでしょうが、まだこの街に日本人はほとんど住んでいなかったので、広い官舎に監理官１人で暮らすのは心細かったのもあったでしょう。都会的でスマート穏やかな方でした。邸宅の離れの１室が提供されました。いつも食事を共にして様々なことを教えて頂きました。彼は灯油を熱源のドイツ製の冷蔵庫を持っていました。アジア、アフリカの僻地に向かうヨーロッパ人向けの品だったようです。でもスングミナサは電化されていたように思います。

監理官の交替

分店を作る準備は進んでいましたが、その最中（さなか）監理官の移動があり、今までの楽園は一転する事態となりました。新監理官は中セレベス・マジェネでらつ腕を振るい、マカッサル隣接のスングミナサに栄転人事で来たのだそうです。岐阜県の警察官出身４０代、若年の私の目から見ても油断のならない意地悪そうな人でした。もちろん即時私は官舎から退去させられ、後には彼がマジェネから連れてきた若い美人のバブ、実は彼の南妻が入ったのです。それからの私は生まれて始めて「いびられる」経験を毎日のように繰り返すことになりました。

彼行政官の立場から見ると、私の仕事「米を集め」は、管下農民にいささか強制を要することなので、それを若輩の私がやろうとしているのは、見ていられなかったのもあったのでしょう。

故郷への手紙

この頃書いた５通の便りを要約、当時を偲びます。

８月の便り

事務所と住宅 この便りを書いているのは、住いを兼ねた事務所、やっと最近住むことができるようになりました。店の前をインドネシア人がノンビリ歩いています。華系人たまに邦人も通り過ぎます。子どもも沢山います。子どもはもちろん殆どの人は裸足で暮らしています。靴をはくのはごく一部の人です。きれいな娘さんもみな裸足、ちょっと幻滅です。

頭の上に買物を載せ、右手で赤ん坊を腰に抱き、左手でサロン（腰布）をたくし上げ、日傘をさしている婦人、驚いたことに口が動いていました。こちらの女の人の服装は、バジュ（上着）布地を二つに折り、首の出るだけの穴をあけ、あと着物の型に切って縫い合わせたもの、下はサロン（大きな袋の下を抜いたようなもの）で、これなら私達にでもできそうです。

事務所は大通りに面した２階建て、下が事務所のある広いコンクリートの土間、２階も同じ広さの部屋、階下の後ろに台所、マンデイ（水浴び）場、トイレ、ジョンゴス、ババ（下男、下女）の部屋があります。店の前には小さな木立と飯屋があり、朝のコーヒーを始め、食事はそこから取っています。普段朝コーヒーだけ、これでボーっとした眠気も覚まします。田舎の店ですから店は汚いけれど、コーヒーの味は上等、すっかり味をおぼえてしまいました。

従業員

店の従業員は３人、事務兼外まわりは華系のホンセン、１０時頃マカッサルから出勤します。事務のワハップはインドネシア、今日はマラリアで休み、他にハチローと名付けた給仕１６歳、かいがいしく紙のせいりなどしています。茶目っけがあって面白いのですが、時々エラーをやります。

プアサ

今日、８月３０日からイスラム教の戒律の「プアサ」が始まります。約１月間日中飲み物も食事も採ってはいけないのです。この月中結婚式はできないので、昨日ぎりぎりまで式々で大変でした。今までもインドネシア人はお祭りだ、何だで休むことも多かったのですが、この月はもっと大変です。何と言ってもお腹に物が入っていないのですから、働けるわけがないのです。住民の５割は実行しているとのことです。１度オートバイにインドネシアの米集荷人を乗せ、村回りをした時のことです。夕方になって突然彼は「ちょっと下ろして下さい。お詣りしたいのです」道端の民家から敷物をかり、路傍で夕べの礼拝を始めました。それは辺りの私達を全く意識しない敬虔な祈りでした。彼らは宗教心の薄い私達には到底及びもつかない厳格さで、戒律を守っているのです。

オースチン

官舎を追い出され、急いで入ったのが「マリノバイバス」の西側、竹林の中平屋の一軒屋、柱も壁も皆竹でできていました。ここに住んだ頃、どんなルートで入手したか忘れたのですが「オースチン」を自分で乗り回していました。運転しやすい車と言う印象でした。この運転も誰に習ったと言う覚えがありません。幸い事故は一度もなかったようです。店を構えた頃は小さなバイクに乗っていました。

１０月中旬の便り

兵役

最近の陸軍の兵役法の改定で、こちらで兵役に服するようになりそうです。もしそうなったらこちらで入隊したいと思います。

家事従業員　最近の身辺のことを書きます。前の便りの後、従業員を補充しました。ジャワ人の下男（ジョンゴス）下女（バブ）夫婦が住み込みで入りました。子供が二人います。仕事は部屋掃除、私の洗濯、食事材料の買い付け、その他の雑用です。食事調理は別にコックを雇ったので、もう心配いりません。他に外回りの掃除番もいます。コック・庭番は土地の人間通いで来ます。

事務所従業員

華系人の倉庫番・看貫（かんかん）係を頼みました。米を買い付ける準備です。この他やはり華系の運転手も雇いました。これで営業態勢は十分になりました。

私の体重

ただ今１５貫８００匁（６０ｋｇ弱）ですが、別に異常はありません。しごく健康です。

セレベス新聞

マカッサルで日本語の日刊新聞が出ていて、毎日配達されます。小説も載っていて、日々（毎日）新聞系統のようです。タプロイド版１枚２ページ切りですから記事は少ないです。でもニュースはラジオで聞いて、新聞は毎日のように載るセレベスの歴史、民俗紹介などに興味があってそちらを読んでいます。スングミナサのラジャー・ゴアが明治の末期までオランダ支配に抵抗したとか、南セレベスの３大ラジャー家の由来も知りました。ラジオでブーゲンビル島のことを知りました。戦局はただならない事態になってい るようで、感奮１番しなければなりません。

ソンコとサロン

昨夜は自動車の故障で村（カンポン）に泊まりました。久しぶりにサロンを巻き、ソンコ(黒い帽子)をかぶりました。夜着代わり、センカン以来のことです。ソンコは馬の尻尾の毛を編んだもの、サロンは茶色で絹布でした。郡長は「良く似合う」とほめ

ましたが、ふあっと楽な服装で、長ズボンよりずっと涼しく外見も悪くありません。私もサロンは持っています。ソンコはトルコ帽より少 し浅く、普通はラシャ、ビロード地で作ります。高級なものは植物繊維で金銀の糸で飾り、４、５０円（ルピア）もするそうです。この地域はマカッサル人の居住地、言葉はマカッサル語を使います。少し勉強しているところです。

ニホン語学級

スングミナサから１６キロほどの田舎で、ニホン語学級の先生を勤めています。これから出かけますが、月・木・土の３日、午後５時から１・５時間、生徒は学校の先生、部落長、郡長、役場職員などです。ニホン語講座とは言え、専門家ではないので、ジャランでもそうだったようにいつも文化漫談になってしまいます。ちょっとした労働ですがマライ語で１時間半、吾れながら良く話せるようになりました。アイウエオをやって、数の数え方、１２月の名も終え、今日は曜日の名を教えようかと思います。こんなことで時間は潰されますが、意義のあることなので、出来るだけ続けたいと思います。

マラカジ高原

２、３日前山巡りをして来ました。ロンポバッタン山（標高２８７１ｍ）の南側で、前に行ったマリノ高原と似たような高原です。ニセコ（北海道の山、１３００ｍ）の高さ位まで自動車で行き、それから先は馬に乗って進みました。当地は相当の高地まで米作、野菜栽培が行われ、その調査でした。雲に入いると１０ｍ先が見えなくなることもあり、寒くてカゼをひきそうでした。晴れると素晴らしい景色です。１０ｋｍ余り続く大斜面、一面雛段のような田圃（たんぼ）が拡がっています。空気は澄んできれいです。雨が上がりもっと先山麓の家々、木の１本まで見えるようでした。気温は日本の秋、爽やかです。すすきがあり、花も咲き、野原を渡る風の音、とても詩的な美しさに充ちています。下界は太陽がギラギラ光り、どぎつい色彩、酷暑に包まれた世界、大変な違いです。

パッサルマラム

ただ今「パッサルマラム」の準備で多忙です。夜市と訳すけれど実際は日中もあり、共進会・・小さな博覧会のようなもの、公けの賭博場も開設されます。会場に建つ１軒を借り南興（ＮＫＫ）も出品するつもりです。バンドを編成し、送って頂いた楽譜を使って華やかにやろうと思います。

退去

手紙にはこう書いているけれど「パッサルマラム」の企画を私が実施した記憶がないのです。多分これをやる頃は、分県監理官との軋轢がいよいよ高くなって、マカッサルに引き上げたのではないでしょうか。セレベスに上陸して間もないが、社会経験のある３０代の加来さんと交代、引継ぎをした覚えがあります。監理官と顔を合わせた

のはほんの２０回程度だったのでしょうが、その顔、挙措動作は６０年近く経った今もはっきり覚えています。余程こたえていたのでしょう。

１９４４年正月の手紙

毎日雨が降って、蛙が賑やかです。これは内地の食用蛙くらいの大きさで物すごく、腹に響く大声で鳴きます。マカッサル事業所米穀課に戻りました。暮れにはここの日本人から注文をとり、会社で餅を搗いて配給する手伝いをしました。餅米はここ産ですが、立派な餅が出来ます。今年はいよいよ兵士として戦場に赴く日が有るかと存じます。その日まで、丁度お年玉のように送り届けられた農業の本１７冊を読むことにいたします。 今年から「雇」から「見習社員」になりました。社員の一番下です。給料・５１円、外地手当２１割（１０７円１０銭）僻地手当１５円３０銭、積立て１０円、食費１５円、海軍機献納資金２０円、留守宅送金を差し引いて手元には８０円くらいが入ります。

カンピリ余話

スングミナサ郊外カンピリに太平洋戦争中「オランダ人婦女子収容所」があったことは以前に書きました。「南興（南洋興発㈱）会便り」にカンピリにまつわる話がにありました。雲母の話 は松江宏次氏のレポート要約です。

雲母

雲母は電気の絶縁体として、通信機には欠かせない重要材料でした。中部セレベス、トミニ湾に突きでた半島の南に散在するバンガイ諸島、その一つラボラボ島に雲母が埋蔵されていたのです。南洋興発㈱の子会社「南太貿」にそこで「雲母採取」することを命ぜられました。マカッサルからこの島に行くには、まず陸路をポソに達し、そこからは海路を辿り、４、５日がかりで到達する辺鄙な処でした。また島はマラリア、デング熱の巣で、ジャングルに猛獣こそいないがニシキヘビがいたりして凄まじい天地でした。

採掘は試行錯誤の末、成功したのですが、それを飛行機で日本に送るには、こちらで原石を剥離サイズごと分類する必要がありました。この雲母を剥離、分類する作業がカンピリ収容所で行われたのです。作業には収容所の婦女子１、５００名があたりました。作業への報酬は布生地、文房具類でした。彼女たちが所内平常のスタイルは半袖、短パンだったと聞いていました。作業の監督に当たった南太貿社員たちはは、逞しい白人女性集団を前に、大いに圧力を感じ、気を使いながらろくに話も出来ない緊張した日々を送っていたと云います。作業は終戦まで続けられました。敗戦となって地位逆転、彼女たちの従者のように社員は懸命に解放を手伝って仕事を終わったとのことです。

尚、雲母のマカッサル渡しの値段は、小さい規格で１トン５万円、大きいものは百万円と言う破格のものでした。（当時私の給料５０円）

空襲

マリノ南洋興発農場に勤務した松谷氏のレポートです。敗戦間近「敵上陸近し」と在留邦人は次々と現地招集されました。松谷さんは１９４５年６月１日、陸軍の名で招集され､海兵隊の軍服が与えられ､海軍が教育すると言う変則的な兵隊になりました。１カ月の訓練の後、陣地に配置されました。

８月１０日、陣地から川をへだてたカンピリの収容所に、突如空襲があり焼夷弾が投下されました。丁度昼食時でしたが、そこの兵隊たちはすぐ救助に向かいました。焼夷弾の数は大変多く、１坪に４、５発もありました。（乾期だったので川を渡れたのでしょう）私達（日本兵）が救助に駆けつけたのを知って、敵機は機銃掃射をして来ましたが、幸い皆無傷、建物の一部が焼けただけで済みました。婦女子にも死者は出なかったようです。この収容所の空襲襲撃事件は、戦後映画化され、松谷さんは見にいった記憶があるそうです。

註 私はこの空襲を知りませんでした。
私が召集検査、即入隊したのは８月１日、場所は松谷さんと同じだったと思います。スングミナサからマリノに向かう道の丘になった左側のきれいな森の中に訓練兵舎がありました。 ここからカンピリは近いはずですが、８月１０日の空襲は全く知りませんでした。それにしても、戦後を考えマカッサル市内高級住宅街は爆撃目標から外した程なのに、カンピリがオランダ人婦女子収容所と知りながら、この時期空襲したのは何故でしょう。（続）

第１０話　マロスの歌

マロスへの誘い

マロスはマカッサルの北４０キロにあります。私がここに赴任したのは１９４４年４月、穀倉マロスの雨期が明け、稲が実った頃でした。　前任地スングミナサで、監理官にいじめられ、クシャクシャになって自信を無くし、マカッサルに戻り、米穀課で憂うつな日を過ごしていました。ミスター・ホンたちとの交遊は復活、雨の降る夜もティガローダーを繰り出し、街を徘徊しました。そんな時、近くに爆弾が投下され、肝を冷すこともあります。アメリカ軍の反撃が始まったのです。

渡航３年目、間もなく２１歳になる乾期の近い頃です。マロス地区支配人の刻仙李（ロォシャンリィ）から「マロスに来ないか・・」しきりに誘われたのです。シャンリィは私が米穀課に入った頃から、事務所に出入りし顔見知りの男でした。福建省の移民一世（新家＝シンケ）３０歳前後、パジャマを普段着にし、中国なまりの下手なインドネシア語を使いながら、物おじしないサバサバとした明るい人柄は、事務所の誰からも好感を持たれていました。

マロスはパンカジェネ・セゲリーと並ぶ南セレベスの代表的穀倉地帯です。華系の大きな精米所倉庫もありました。当社はこの権益を接収する形で、米の集荷事業が始め

たのです。それで従来の華系経営者に替わり、ブローカーだったラォシャンリィが抜てきされて現地統括者になっていたのです。

良質米（パンダ種）を年間３千トンを集荷する会社の一大拠点でした。マロスには、私がスングミナサに店を出す以前に、分店が出来ていました。分店主任の勝田さんは、３０代の人で、背の高い好男子で、この頃彼は中央セレベスに近いパロポに転勤し、マロスに日本人がいなかったのです。シャンリィの再三の誘いに私は「ここで出直しするか・・」決意、和田米穀課長に「マロスに行きたいです・・」申し出ました。　「よかろう！」やはり骨を拾ってくれました。

『ひと言』

米の等級には「ラパン」「パンダ」「バッカ」と別れていました。「ラパン」「パンダ」は日本米の食味に匹敵しました。 特に「ラパン」米は寿司米として使われたほどです。マロスは「パンダ」米の産地でした。

仕事

精米工場、倉庫はマロスの街外れ、パレパレに通ずる自動車道路に沿った曲がり角の広い敷地にありました。工場には巨大なドイツ製ディゼルエンジンと精米機が据えられていました。工場の一隅に事務室があり、２人のインドネシアの書記１人の娘が伝票・帳簿を扱っていました。シャンリィの直属の外回りには、適当に忠実で、抜け目のない華系人を含む幹部２，３人がいました。

日系２世女性と結婚していて、捕虜収容所行きを免れた、恰幅が良く気のよいディゼルエンジン技師、オランダ系ダブルス、ゴールデンホーフもいました。工場には常時２，３０人の労働者（クリーと呼ばれました）が働いていました。この精米機はドイツ製なのに、籾からいきなり白米に仕上げるスグレものですが、籾を２階の注入口に上げる仕掛けがないので、麻袋に入った籾を担いで階段を上がって運ぶ人が必要だったのです。

マロスの東方には山が連なっていますが、すべて石灰岩でできていて、裾野が無くいきなりテーブル状山地が始まります。麓から一面広大な平野が海まで続いています。平野の真中を南北にパレパレに通ずる国道が通り、東西にはマロス川に沿って、バンテモロン（滝）山地に直線で行く砂利道があり、先は険しいジグザグの山道を上ってチャンバ平地、更にワタンポネ、センカンに向かう道になりました。チャンバ街道に沿い、バンテモロン（滝）とマロス川を水源に大きな潅漑溝が設けられ、支線はわが家の近くから、更に海に向かって伸びていました。この潅漑溝のお陰で、マロス川の北側一面は広い豊かな水田地帯となっていたのです。

マロス川の南側は緩やかな丘陵が拡がり、その一角に海軍の「バンダイ飛行場」が設営されていました。山側にはマカッサルからパンカジェネ山地の鉱山に通ずる鉄道建設が行われていたようです。こちらの土は赤く、表土も浅く、水の便も悪いので畑作も十分ではないように見えました。

米の集荷の仕事は、ロウシャンリイに任せ放し、私はマロスのシャッポ（帽子）役を演じていたら良かったのです。シャンリィが「顔を出してくれ」言った時、動くのです。それでも、大抵午後は暗くなるまでオートバイか馬で田舎を歩きまわりました。始めての道をトコトコあたりを見まわしながら行く、仕事よりもそうすることが好きだったのです。

帰りは大抵「日が入った」頃でしたから、家に着くのは７時過ぎでした。仕事はすべては順調に進んでいるようでした。ここにも電話はありませんが、毎日何台かマカッサルから精米を運ぶトラックが来ましたので、それで支店との連絡は付いていました。要するに順調に米がマカッサルに続けられたら良かったのです。

『ひと言』　精米工場は、現在のマロスに入る橋を渡り、チャンバ街道との十字路の角地にありました。それらしいものは今は見あたりません。

住まい

マロスの街全体も森の中にありました。村の中心（精米工場）からマロス川の堤防上の道を西に１００m行くと、右に華人 の煉瓦作りの古い社（やしろ）があり、その隣リＴ字路の角に私達の家がありました。社の辺りに大きな木（ガジュマルでしょうか）が茂って、蛸の足のように枝を地表に落とし、厚い緑のジュータンをたらして、他の世界と切り離していました。道は珊瑚礁の砕片が敷き詰めたもので、ゴツゴツとしてとても歩きづいものでした。

家は道の面し、少し低い処に建てられ、家の向こう側はマロス川までクラパ（椰子）林が続いていました。本道路を通る自動車の音も、全く聞こえない静かな処です。 家の骨格は木で、外壁は板張り、中仕切りは板と竹を割った板状のものでした。玄関から応接室があり、奥に大きな寝室があり私用、小さな寝室が二つ続き、そこ から外に出て、回り込むと「マンディ場、トイレ」がありました。トイレはコンクリートの床に溝が設けてあるだけの、田舎ではよくあるタイプです。

応接室の右奥は食堂、続いて内井戸のある厨房、ジョンゴス部屋がありました。「３９日の航海」を共にした、千葉出身野菜栽培指導の石井君が寄留していましたが、程無く新任地に去って行きました。

シモン

家にはカシモン通称シモン、真面目で４０年配の色の黒い下男（ジョンゴス）と妻（バブ）が付いていました。２人は最近夫婦になりました。勝田さんが仲人になったのだそうです。シモンはジャワ人、少年時代からみなし児、長いジョンゴス暮しの間ずっと独身でした。

少し古いソンコをかぶり、白い折り目のついた長ズボン、白いワイシャツ姿で、どんな時もいささかも行儀を乱さず、微笑むと心から楽しい笑顔になりました。柔和で穏

やかを絵にしたような人でした。用事のある時は必ずまず小さな声で「トゥアン＝旦那！」とよびかけてから話し出しました。

シモンは使用人の頭で、仕事は妻とともに家の中の掃除、食事の給仕、すべての買い物役でした。２キロ半径の村落で定期的に開かれる朝のパッサル（市場）に出かけ、その日の食品を買物篭に集めてきました。使用人は他にコック（コッキー）ヒンドゥー１７歳女性、洗濯と水汲みなど外回りをする通いの男がいました。 勝田さんの残していった猿２匹犬２匹闘鶏３羽もいました。

私１人のために４人の働き手がいるのです。セレベスに来て辺地の定住は３ケ処目ですが、ここの家族が１番多かった・・少し戸惑いました。でもここは交通の要衝で意外に不時の来客が多かったのです。それも昼食時です。客が３，４人来たりすると、この人数でもてんてこまいになります。２０日１ケ月、日が経つにつれ、暮しに慣れ、毎日がとても楽しいものになって行きました。４人の給料は会社持ち、シモンは二十円、妻は十円でした。

読み書きで昼夜逆転

仕事は直接手を下すことも無く、直属の監督者もいない気安さと落ち着いた暮しで、私の奇妙な暮しが始まりました。子どもの頃から「宵っぱりの朝寝坊」でした。床の中で本を読むくせです。今は何のお咎めもなく再開しました。毎夜夜半過ぎまでそんな時間になりました。

読み物は、その頃マカッサルに出店した本屋から「中央公論」「改造」など難しい本を１０冊ほどまとめ買したのを片っぱしから読みました。始めは面倒で歯が立たなかったのですが、段々呑み込めるようになりました。マライ語辞典はあったけれど国語辞書は持っていなかったのです。

「セレベス新聞」の３分の１が文化欄で、セレベスの歴史、地理、民話などがあって、随分愛読しました。父に送って貰った「古事記」私が本好きと知って、マロスの知人は色々の本を借してくれました。中に藤村の「夜明け前」ナチス・ドイツの聖典「土地無き民」などがあります。

「土地無き民」は何部にもなった大冊で、懸命に読み通しました。でも今は主人公がアフリカのドイツ領植民地から敗戦後故国に帰り、巷の中に消えて行く最後のシーンだけがうっすらと記憶に残る程度です。

その内、やたらに書くようになり、寝る時間がどんどん遅くなったのです。どんなことを書いていたか、召集された時は、厚さ１０ｃｍのノートを残していました。１月半たって戻った時、わが家には前線から逃れた社員が数人避難していて、この人達がノートをきれいさっぱり１枚残さず焼き払っていました。涙が出るほど残念でしたが、私が再び戻るとも思わなかったでしょうし、自分達が生死の境を彷徨している時、愚にもつかないことを長々書いているのに、腹が立ったかもしれません。

戦争の終わり頃１度だけ「公有地借地申請書」を独りで仕上げたことがあります。マカッサル近くに米倉庫を設けようとしたのです。許可は出たけれど、実施出来ませんでした。申請書のお了いの言葉が「奉願候也＝願い、たてまつり、そうろう、なり」で結ん だのが記憶にあります。

コーヒー

朝１０時頃にコーヒーを飲みます。コーヒーは始め応接室に置いていましたが、ベッドのティーブルに置かせました。シモンの長い間のしつけでは、主人の寝ている部屋に入りたくないらしく、気が進まない感じでした。コーヒーで目を醒まし着替え、精米工場倉庫を１まわりするのが午前の日課でした。コーヒーはこの近くの山地で採れるものでしょう。大きな平鍋でガラガラと煎って、粗く粉にひいたのを土瓶でグラグラ煮立てます。街の店では釜で煮ることもありました。

余り熱いと皿にあけて冷まして呑む習慣もあります。ほんの少し砂糖を入れます。余り濃厚だと先に黒糖を口に放りこんで飲むこともありました。シモンは自分の決めた朝の日課を崩さないから、コーヒーは大抵冷たくなっていました。底に滓の溜った上澄みを飲みます。飲めば大抵眠気は醒めてしまいます。

食事

私の食事は昼食からで良かったので、普段はのんびり調理しているようでした。泊まり客があると「朝食は・・？」その朝だけは少し忙がしそうです。午前工場を１回りして戻ると、昼食めがけて来る旅の途中の人もいました。マロス駐在の台湾拓殖や監理官事務所の若い事務官、農業指導員、食費は自賄いなのでたまに食卓をのぞく気の毒な位粗末な食事でした。若い食い気の多い人達ばかり、親しくなるにつれ時々食べに来たり、米運搬トラックの海軍下士官もいて、１人で食べることはほとんどありませんでした

献立はセレベス式西洋料理、昼も夜も余り変わりありません。でも若くて健康だったから何でもうまかった。 右手にスプーン、左手にフォーク、ナイフは使わないのがオランダ植民地スタイルの作法だそうです。ナフキンは必ず胸のボタンにかけひざに広げる。各自が広い皿を手許に置いてティーブル中央の料理、ご飯をてんでに取って食べます。インドネシア人は右手の指で食べますから、料理はみな賽の目に刻み、御飯と混ぜやすくしています。ドロリとした料理はなかったようです。

にわとりを椰子油で揚げ、カレー味で軟らかく煮たもの、胡瓜をバラバラに切った酢のもの、魚のから揚げ、煮もの、誰が教えたかカレーライスもメニューにあったようです。味噌、醤油は全く手に入りませんでしたが、全然不自由とは思いませんでした。若かったせいか、土地の味に順応していました。野菜の切れた時期のカンコン（水草の種類）だけはどう料理しても旨くならない、スープにしてもほとんど食べられませんでした。

果物は季節季節で楽しみました。ピーサン（バナナ）パパイヤ、ナナス、ザボン、マンゴ、ナンカ、特に雨期の終りのドリアンは忘れらりない味でした。

森の中は日が沈むとまたたく間にくら闇になります。マロスに電気はありません。食卓には竹ぼうきの柄くらいの小さいホヤとコーヒー皿くらいの反射版のついた灯油ランプを２つ置きました。 普通の家は椰子油の「灯心」でしたから、これだけで特権の部類だったでしょう。夕食にはソンコをかぶり、パジャマの上着にサロンを付けたくつろいだ服装になりました。

シモンの作ってくれた白や赤のもち米のバロッ（ドブロク）透明で強い酒、結構な味でした。大事にしていたグラスを使いました。それで１，２杯やると食欲が出るとわかり、バロッを切らさないようシモンに頼んでいました。食事の後椅子にかけ緑の樹の間から、青い空を眺めたり、降る雨の音をだまって聞くのも良い気持ちでした。

戦争の終りの頃インフレが進み、月の食費は１５０円以上になったのですが、私の負担は月１５円だけ、あとは会社持ちでしたので気は楽でした。

結び別れ

シモンの妻は出産が近づいて実家に帰えり、シモンも通いになりました。１時わが家は私１人になったのです。処がコッキーのヒンドゥが泊まると言い出しました。寝室は私の部屋に続いて２つ あり、その１つを使うことになりました。 各部屋の仕切りは板張りか、バンブー（竹）を割った板１枚、暫くして２人は成るべくして結ばれました。これにはシャンリィ、シモンの差し金があったのかもしれません。

こうなっても表向きは以前と全く同じでした。ニュースが統制されていたとは言え、戦争の前途に次第に絶望感が強くなっていました。自分の意志で来た処とは言え・・南海の地にこのまま果てるのか・・死ぬのはあまりにも早い・・はかなすぎる・・何にも残らない・・耐えられない思いがつのっていました。

彼女はブギス人、小肥り、家は近所の森の中らしい。年齢はキラキラ（約）１８歳と言うけれど、２０歳以下には見えませんでした。普段ほとんど台所から顔を出しません。料理は上手でも下手でもないけれど、私達の口に合いました。ヒンドゥーは食卓のものを下げる時は出て来ました。料理を炊事場の入り口まで持って行くと、ちょいと残りりものをつまみ食いするくせがありました。ヒンドゥーは私１人の時でも、きっと３，４人前の料理を作りました。ちょっとした残りもので、家族中の食事は済ませたようです。だから急に客があっても、皿を増やすだけで慌てずに済んだのです。

別れの時は予期していたけれど、慌ただしく来ました。私の兵役召集です。どんな別れだったのでしょう。それが全く記憶がないのです。互いに若かかったからか・・思い出せないのが、申し訳けない思いになります。１月半後、私が兵舎からマロスに戻った時、彼女は家にもういませんでした。

赤ん坊

シモンの妻が４５年始め頃、男の子を出産しました。もちろん彼の初めての子供です。可愛いいかったに違いありません。毎朝３人で現れました。健康で大人しく、いつもニコニコと機嫌良く、一家の中心になりました。私も仕事から帰って、裸の彼を抱くのが楽しみでした。現場で時には鬼のように言われもした私も、この子に接する時は気が安らいでいました。赤ん坊を抱いて食堂や炊事場をぐるぐる回ると、シモンはハラハラしながら微笑みは崩さず一緒について歩いたりしました。シモンの妻も、コックのヒンドウも一緒にあやしたりしました。

坂広栄君

マロスで長く１緒だったのは坂広栄君、同年でした。彼は北セレベス・マナドの東方ハルマヘラ島・テルナテにあった南興系水産会社、沖縄「追い込み漁法」の漁師でした。ハルマヘラ島の北モロタイ島が米軍の空軍基地となり、そこから爆撃が始まって、島にいられなくなり、メナドから陸路歩いて南の私達の処まで辿り付いた人です。１９４４年暮ではなかったでしょうか。

奄美大島の生まれ、沖縄・糸満の漁師連でした。背は低いががっしりした体格をしていました。良い仲間になり、何をやるのも一緒でした。食事の時２人の故郷を話したり、ハルマヘラの魚取り、少年時代の沖縄の話を随分聞きました。苦労した生い立ち、追い込み漁法の苦しい労働などです。

１９４５年５月兵隊となりました。後にスリリ収容所で合流、同じ船で引揚げたのですが、後の消息はつかめていません。

ジャランジャラン

夕食の後月が明るい夜などロタン（藤）のステッキを持って２人で散歩に出ました。椰子がマロスの街を覆っています。大きく枝を張った円頭樹も処々に青い茂みを作っていました。木の葉一枚一枚を地面に映し出す、南の国の明るい月の光、街の中心１キロ程の広いアスファルト道、珊瑚礁の砕石を敷いた裏道を端から端まで、どこへともなく歩いて、月の夜を楽しみました。

坂田隆三郎さん

坂田さんがマロスに見えたのは、坂君が召集された後ではなかったでしょうか。物静かで優しいスマートな方でした。東京出身、１９４３年西ニューギニア・マノクワリに赴任、戦況の悪化に伴い、４４年６月２１日同僚３０人と共に脱出しました。後に「地獄のベラウ地峡」と言われた難所を、短い日時に無事突破、船を乗り継いでアンボンにたどり着いたのが７月１７日だったそうです。（南興社員一行は、前１９４３年・前後３回９ケ月に及んだ「南興社員を長とした調査隊のベラウ地峡踏査資料」に基づいて行動出来たので、最善、最短距離を辿って地峡突破出来たのです）

さらに坂田さんたち４人は、アンボンからジャワ行きの海軍輸送船に便乗しました。マカッサル港に到着寸前沖合で、飛行機の攻撃を受け船は沈没、泳ぐこと３０分余りで幸い護衛していた水雷艇に救助され、マカッサルに着いたとのことです。しかし１人の方は船の中にいて脱出出来なかったといいます。（岩田武夫さんの手記・臆病者の参戦雑記から）

坂田さんはマロスでは、こんな体験を一切話してくれなかったように思います。戦後仲間と「読売広告」社を興し 後に社長になられました。

『ひと言』 ◎地獄のベラウ地峡 ニューギニア西部の地形を恐竜の頭に例えられます。その首の狭い部分がベラウ地峡で，広さは南北１００ｋｍ，東西北側で５０ｋｍ，南側で３０ｋｍです。この地峡の南北に５００から１０００ｍの３条に山脈が走っていますが、北に標高３０００ｍ、南には２５００ｍの山脈があるので、東西両方向から雨雲がまとまって吹き付け、多量の雨を降らせ、全面熱帯雨林と沼沢地をつくっているのです。

１９４４年、マノクワリにいた陸軍２万人は、近くのビアク島などを攻略され、補給路を遮断されたので、そこでの自活ができないと、２万の内１万５０００人を７月１日ベラウ地峡を通って、西部に向かわせました。南興社員３０名が出発した１０日後のことです。当時陸軍には内容の空白な５０万分地図しか持っていなかったそうです。（南興ベラウ地峡調査は、海軍命令によるものだったので、報告書は海軍に提出されましたが、陸軍に開示されなかったのです）

その結果１万５０００人の大軍は凄惨な飢餓、傷病地獄に遭遇、１月後に西岸に達した兵士は半数の６、７０００人になり、さらに西岸に兵を養える食料がある筈もなく、戦後生還を果たしたのはわずか３０００人に満たなかったと言います。（「南興会たより」から抜粋しました）

＊戦後、上演有名になった加東大介の「南の国に雪が降る」は、この時マノクワリに残った５千人の兵士たちの物語です。

洗濯

シモンに服装に比べ、坂君も私も行儀は悪かった。とりわけ私が悪かった、夜は一応きちんとしていましたが、昼は暑いのにかまけ無帽長髪、ランニングシャツ、半ズボンにサンダル、上陸時の訓戒はどこかに飛んでいました。若さにまかせ、体ものしのし使ったから衣類の汚れもひどく、けっこう毎日洗濯ものは出ました。雨期には食堂の一隅にびっしり、かけなければ間にあいませんでした。洗濯は通いの背のひょろりと高い人の良い男がやりました。年中半ズボン一つ、トイレ・マンデイ場掃除、水汲み、庭掃除、猿、闘鶏の世話は彼の仕事でした。

改造

食堂の外の差しかけが暗いので、庭の隅に移しました。 風の強い時は吹き込みもあるけれど、食堂も玄関も明るくなりました。シモンの部屋と炊事場も改装、炊事場の床は煉瓦を並べただけで、コケが生えたぬるぬるがなくなりました。私と坂君は炊事場の井戸替えをし、まわりをコンクリートのモルタルでぬりました。屋根のニッパを取替え、小屋の竹の柱、竹壁も新しくしました。少し広くなりしっかりとなりました。外に出られない雨期の遊び仕事でした。

庭

乾期が近くなって広い庭が欲しくなりました。バナナが十本ほど生えている隣りの空き地を借りました。仕切りを取り払い、地面に砂を入れ、はだしでも歩けるようにしました。食堂から庭に出られるドアをつけました。家族や客は庭に気楽に出入りできて喜ばれました。

（マロスの一家　　1945 年 3 月ころ）

母屋と少し離れたマンディー場のそばにザボンの木がありました。この木の実は買って来たのに比べ特別に変わってうまいわけはない筈なのに気になって「どんな色になる」「房はどうだ」などとシモンに尋ね、時々木の下に行き実を数えたりしました。食卓に上るザボンには色々の種類がありました。紫に近いのが多かったが、黄色もあり、房の細いもの、太いもの、皮も厚い薄い様々です。うちのザボンは紫の毛糸の太さの房が無数に付いた中くらいのもので、とれたザボンは普通砂糖をかけて食べますが、砂糖が次第に貴重品になったので、かけたりかけなかったりして１家中で食べました。

庭にクラパ（椰子の木）があり、実を取るのに高さ１０ｍの木登りは坂君と下働きの男が担当しました。坂君は陸路何百キロを歩くうちに、こんな芸も覚えたのです。クラパの若い実の白い乳色の果肉を食べたり、中の水を実と混ぜて飲みました。椰子の水は腹の中までサーッとする味です。

早めに仕事を切り上げられた時、庭の猿をからかったり、闘鶏を眺めたりしました。その内に、庭に鉄棒も設けました。「兵隊には近々取られる・・」身体を鍛えることにしたのです。

爆撃・廃虚

毎夜８時と１２時にフィリッピンに近いモロタイ島から、マカッサル行きＢ２４爆撃機の定期便がマロスの頭上を通るようになりました。１９４５年になってからでしょうか。遠くの爆撃音も聞こえました。「何・マカッサルには４０粁もある。バンダイの飛行場だって１０粁はあるんだから・・」なれるに従って、身の回りにだけ残されたいささかの平和を切なく楽しむ毎日になっていました。

１度マカッサルの爆撃の跡を見に行きました。爆撃は中華街に限って行われたのです。中華街の建物はレンガ作りでしたから、瓦礫がるいるいと続いているだけ、わずかに浮浪者らしい人影が瓦礫の隙き間に見えました。中華街にあった会社事務所も、通った本屋も、友人の住まいも跡形もなく、事務所は森の中の住宅地に移転していました。

交遊

我が家には雑多の職種のたくさんの客が出入りしました。半分はマカッサルから紹介された人でした。元大学の先生・元料理屋の主人・北海道で農業をやっていた人・柔道の先生・北海道出身の旋盤工など・・・。地元マロスでは三井農林社員、自称理論右翼、台湾拓殖の若い所長は「夜明け前」「土地無き民」を貸してくれ、チャンバの山の奥へ泊がけで連れて行ってくれました。

台湾嘉義農林学校出の台拓社員翁さんたちとも知り合いました。嘉義農林は戦前「全国中学野球大会」でいつも台湾代表になる有名校でした。少し年長の同志社大出の台拓青年社員とも知り合い「戦争はどうなる・・・」何度も話し合いました。

マロスの監理官高田さんを招いたことがあります。岐阜県警察出身でしたが、温厚公平に扱ってもらいました。この時は、シャンリーが船のコック時代に覚えた福建料理を前日から仕込んで作っててくれました。大きな瓜に豚肉、ねぎを詰めたものを軟らかく煮込んだものがメインでした。「旨い旨い」と食べ、シャンリーの持参の中華酒を飲んでもらいました。数多い客から聞く沢山の耳学問がありました。「大人になろう、大人になろう」精一杯背伸びを続けた少年は、少しづつ大人になって行きました。

第１１話　続・マロスの歌

ラォ・シャン・リイ

マロスを語るのにラォシャンリィ（刻仙李）はどうしても欠かせない人物です。福建省出身の移民＝新家、少年時代に故郷を飛び出したようです。年齢は３０歳前後、すらりとした良い男でした。「私は商人、金もうけが趣味、金を溜めるのは手段だ。商いでなら何時裸にされても平気」と言っていました。１度だけ見せてくれた彼の財産は、みかん箱程の木箱に溢れるばかり詰まった金貨、金製品でした。「これだけあればいつ戦争が終わっても、またどこででも商売を始められる」と云いました。

家族は中国人の妻と、インドネシア人の第二夫人に産ませた娘と三人暮らしでした。一家が食べるだけだっけなら、彼は造作もなく稼ぎ出せたでしょう。シャンリーは仕事では鬼になる処がありました。でもどれ程本気で打ち込んでいたか、若い私は正体は掴んでいなかったのではないでしょうか。

マロスは、毎年３千トンの良質米が集まる南セレベスの大穀倉です。彼は戦前、米の集荷と精米工場を独占してきた華系有力経営者に代わり、南興社員の籍を持ち、大きな買い付け資金と物資を自由に動かし、地区の数十人の米集荷人を統括する地位にいました。一方インドネシア人社会の政治の上で、階級の高いラウト郡長の親戚のダエンパトンボンを顧問的立場に据え、会社運営の大半を掌握、戦後に備え、このチャンスを利用、野心を満たそうとしていたのは、多分間違いのないことでしょう。

戦争中だから、一応私の部下と言う形になっていたけれど、彼にとっての私は何だったのでしょう。インドネシア人への抑えと、時々飛び込んで来て無理を言う日本人に対応する役目も、彼の期待の内だったのでしょう。

シャンリィは家の食卓の常連の一人でした。週に２、３度気の向いた時に来て「まずい、まずい」と云いつつ遠慮なく食べました。自分が以前料理人だったのを誇示したい処 もあったのでしょう。時々マカッサルで仕入れた「豚肉」を自分で料理し、豚肉を食べない敬虔なイスラム教徒の使用人たちの顰蹙をかっていました。そんな時以外は「トゥアン・シャンリィ・・」敬愛されていました。

シャンリィの娘は玉枝（ギョッシィ）小学三年生、少し舌足らずな甘えた声の主、色白でスラリと背の高い可愛いい少女でした。「後、五年もしたらマロス街道一の美人・・・」日本人仲間の話題でした。

彼は思い出したように、時々「トゥアン戦争は何時終わるだろう」聞いて、私を困らせました。敗線も間近かになった頃「戦争が終わるって本当か・・」と聞きました。敗色覆うべくも無くなり、私の兵隊入りも間近と気をクサラせていた私をガクゼンとさせました。

そんな中、一生忘れられぬ出来事が起きました。１９４５年７月通知があって「８月１日マカッサルで身体検査、即日軍隊に入隊せよ」 徴兵命令です。私は２２才になっていました。本州にいる人達より何年も遅くれて来た兵役です。別れの日、彼は３つのプレゼントをしました。１つは、お金を３千円、インフレとは言え、私の手当を含めた給料の１年半分です。彼は戦争の先のないことを決断、手元の「米買い付け資金」を回してくれたのかもしれません。

２つ目はタバコ、もう全く私達の目の前に出る事のなかった、ジャワ産高級タバコ「マスコット」を３カートンくれました。３つ目は、スイス製腕時計、中古とは言えこれも簡単に入手出来る物ではなかったのです。私の日本からの時計は各地を移転の間に、紛失、マロスでは持っていなかったのでしょう。彼はそれらの品の使い途を説明しました。「兵隊では上の者に可愛いがられなければ苦労する。タバコを使い物にしたらいい。金もいくら有ってもよいものだ。兵隊は時間で動くもの・この時計を使いなさい」私がこれから向かうのは死地・・、お互いもう２度と会うことはないのです。私はそれまでにこんな高価で、貴重な物を贈られたことはなく、又素直に受け取った経験もありません。「トリマカシ、バニャ・有難う」繰り返すだけでした。

９月半ば、私は図らずも再びマロスに戻りました。「シャンリイ１家は敗戦の直後、日本人に協力した報復を恐れ、行方知らずになった」とのこと・・。彼は日本の敗戦で「商売の賭けに負けました」でも「裸にはならなかった」のです。あの時、見せてくれたミカン箱一杯のお宝を活用、どこかできっと再起を果たしている」と信じています。　立場を代え、あの時私ならどうしていたでしょう。スケールの違う人間に出会っていたと思います。戦後、マカッサルに長期滞在した石井さんに、１家の消息を尋ねてもらったけれど、やはり全く行方が判らないようです。

マロスに行けたのは、和田米穀課長がスングミナサから敗れて帰って来た私の「骨を拾ってくれた」からです。 使うつもりだった私が、実はラオシャンリイに使われていたことも分かりました。セレベスで働いた３年間の大半は、身近に教えを乞う人のいない環境でした。若年の上、短い時間の中で、いつも「１人で考え、判断、実行する」ことを身に着けていたのです。成功、不成功、様々 な経験を交えながら・・

戦前南洋貿易㈱に入社、現地「旧南洋群島」に赴任した若い社員達は、早速離島売店に派遣されました。ほとんどは単身か夫婦だけで出向き、島民と交流し商売を覚えて行ったと先輩に聞いたことがありますが、私のおかれていた状況は正にそれでした。この教訓は、後の人生にどれだけ役だったか、私の生涯の指針を得た学び舎だったのです。後年ある仕事をすることになりました。１人の若者に「失敗を恐れるな。結果の一切は私が引き受ける。心配せずにつっ走れ・・」と言い、また１人は「彼は、この分野で自分より出来る。思うようにやらせ、私はそれに乗っかって見よう」両者共期待以上に働いてくれました。

人間は信頼され任せられると、元々以上の力を発揮できるものです。こんな若者の生きざまを見ているのもまことに楽しいものでした。

パッサル・マラム

スングミナサで出来なかった「パッサル・マラム」を、１９４４年夏マロスで参加しました。この頃はまだ空襲は始まっていませんでした。パッサル・マラムと言っても日中から始まります。開催期間は３、４日でした。入場料は取ったでしょう。行事一番の目玉は「公設トバク場」です。これに併設、博覧会的な展示をマロス駐在の企業に求めたのです。「ＮＫＫ」の竹とニッパ屋根の小屋を建て、丁度届いていた「イセ

キ」小型脱穀機を数台並べ、脱穀作業の実演をしました。「日本農民の武器（スンジャータ）」などと書いた横幕を掲げました。

赤痢

１９４４年発病、病気の知識も薬もなく、苦しみました。下痢が続き、糊状のものが出て、あとはもう何もない筈なのに腹が絞る、とても苦しい。まいりました。やっと起きて、公けの診療所に相談したら、医師補のアンボン人がバイエルの薬をくれました。見たら木炭を錠剤にしたものです。でもこれを飲んだら下痢が止まり、次第に良くなりました。

脚気・転地療養

敗戦近くなって、脚気の症状が出て、チャンバのパッサングラハンで療養しました。毎日野菜スープとカッチャン・イジュー（青豆）を食べ続けた覚えがあります。１月足らずの滞在だったでしょうか。その頃チャンバから山の尾根沿いに、東のシンジャイに結ぶ道路工事が数百人の労務者を動員して行われていました。戦略用の道路だったのでしょう。

マロスからの便り

センカン・スングミナサからは、再三長い便りが国に届いているのですが、マロスからは葉書２通、封緘葉書１通だけです。多分途中で船が沈められ、出しても届かなくなっていたのでしょう。 その内の一通からの抜粋

「先便にも書きましたが、現在別な田舎に来ています。ここの田植え時期に、いろいろ観察できました。苗が長すぎると頭を切り揃えることがあります。勿論植える寸法は目加減です。でもなかなか上手で、筋は大体揃っています。除草をしているように見えないけれど、不思議と草は少ないです。稲の成長が早いのと株間が狭いせいかもしれません。

収穫は小さな刃物で穂先だけ摘み取ります。ポトンパディと言います。１人１日４分の１反くらい。脱穀は竹の棒で搗き、精米にするのには、更に堅木の棒で搗いて行います。収量は良い処で３，５俵（玄米）手入れしないわりには良く取れています。

昨日父上の１月１１日付けの手紙を受取りました。お尋ねの正月料理は「雑煮」だけ、でもこれには餅、かまぼこ、菜、だしは鰹ぶしでした。その他に内地から送られた真心の清酒、ビールもあります。ご安心下さい。２２歳になりました。 節句の夜に(多分 44 年５月のことでしょう)」

パテケ － 中馬（長野県）段付馬（北海道）

毎夜遅くまで起きる生活が続いていました。普段は物音一つしない静かな処でしたが、時々鈴の音が聞こえる夜がありました。おびただしい数の音です。「あれは何の

音・・」翌朝聞いたら「パテケです。たばこ、椰子の実など山奥の物産を、何十頭もの馬の背に振り分け荷物にし、涼しい夜の内に列になって運んで来ます。一頭一頭に鈴が付いていてそれが 響くのです」。

街の東側チャンバ街道入口の市場近くに馬達がいました。そこには馬方相手の宿、食堂などもありました。幹道はおおむね整備されているけれど、その先は一歩入ると人の歩く道しかないので、奥地で取れた物産は馬の背で市場に持って来なければならなかったのです。昼歩くと車の往来はあり馬が騒ぐ危険もあるし、暑くて馬も疲れるので専ら夜の通行になったのでしょう。

それで思い出しました。私の街も、開拓初期道路が不完全で、鉄道支線のなかった頃、奥地の農産物は皆馬の背に載せ、それを何頭もつない往来したそうです。段付け馬と言いました。街の入口に雑穀商、飲食店、宿屋などが軒を並べていました。今もなごりがあります。マロスと同じです。本州では奥地に塩を送るのに馬や牛が使われれ、これを「中馬・ちゅうま」と言ったようです。

ミニャ・クラパ・椰子油

日常家庭で使われた油は殆ど椰子油でした。灯火、料理用だけでなく、田舎で女性は髪油としてもつかいました。椰子油は少し古くなると酸化し独特の匂いがしてきます。帰国後椰子油が配給されたことがあります。久し振りの椰子油の匂い、強烈にセレベスへの郷愁を感じたものでした。

飛ぶにわとり

セレベスのにわとりは大変元気がよく、かごの中の闘鶏は別として、普通はほとんど放し飼いでした。あれでよくよそに行かないものだと思いました。車で走っている時、並行して飛ぶのもいました。相当の速さでした。味が良かったのはあの十分の運動のせいでしょう。

バンテムルンの滝

マロスの名所と言うと「バンテムルン」ですが、当時は全く自然そのまま、訪れる人もまばら淋しい処で、私も２、３度くらいしか行ったことはありません。もちろん珍しい蝶の捕れる名所だなんて誰も言ってくれる人はいませんでした。

私の兵

１９４５年６月、満２２歳になりました。８月１日召集、即日スングミナサ郊外森の中の、竹の柱と壁に椰子の葉（ニッパ）の屋根の兵舎に入リました。 真中に通路の土間があり、両側に高さ５０ｃｍ程の竹の床、いわゆる飯場様式の小屋です。リックサックには自分の使う毛布、敷布、私服（白い背広）インドネシア服（ソンコ・サロン）Ｙシャツ、洗面用具、たばこなど、持てるだけ持って行きました。毛布（寝具）を持参せよと言う指示です。この頃は軍隊も兵士の寝具の用意ができなかったのです。

貰った服はぺらぺらな生地の海軍陸戦隊式の兵服、襟に赤い星一つ（２等兵）帽子 には錨が付いていました。班長は陸軍下士官、小隊長は海軍と陸軍の士官、下士官、陸海混成なのです。兵舎、用具、食事は海軍が一応用意したが、海軍には民間人を召集する権限がなく、士官、下士官が少ないので ハルマヘラ、モロタイから撤退（敗退）してきた陸軍の権限を借り、私達民間人を根刮ぎマカッサル防衛に駆り立てることにした・・そんな兵隊でした。

マロスで知り合った台湾拓殖会社の若い台湾人（嘉義農林出身）社員も１人同じ班員でした。同年で一番若かったので一番親しくなりました。分隊長は私の属する南興社系列マカッサル水産の漁船船長で兵長、３０代後半の人です。そのよしみか私を班の事務係に指名してくれました。私と翁君の外は、皆３、４０代、前職は土工、大工、左官職などの人です。ほ伏前進、手りゅう弾投てきなど、入隊翌日から訓練は始まりました。若い翁君や私には造作も無い訓練でしたけれど、年配の人達にはとても辛らかったようでした。

敗戦

敗戦のニュースは１５日は何故か何も知らずに過ごし、１６日朝になって、中隊長の当番兵がひそかに「戦争は負けたぞ。昼頃知らせるらしい」と伝えてくれました。先に聞いたせいか「戦争は負けた・・」聞かされても、全く感動がなく「あぁ、戦争って止められるものだったんだ」それが一番強く心にずんときた思いでした。考えて見たら、私が小学校２年１９３１年に満州（中国・東北）事変が始まり、以 来１５年間戦争の中で成長、成人になりました。そんな戦いに終わりがあるなんて、とても考えが及ばないまま過ごして来たのです。

幸か不幸か、マロスは電気が無いのでラジオも聞けず、新聞もニュース統制で、戦争の惨禍を殆ど触れずに過ごしていました。セレベス島背後、石油基地タラカン島が４月、バリックパパンが７月既に攻略され、前も後ろもみんな全部囲まれていたなんて、全く知らなかったから、お仕舞いま でのほほんとしていられたのでしょう。昼夜問わず続いた爆撃はぴたりと止みました。

８月セレベスは乾期の最中、良い天気が続きます。何日かして青く晴れた空に、緑十字の飛行機が我が者顔に兵舎の頭上すれすれに何度となく飛び回りました。豪州か、モロタイからからの連絡機のようです。「戦争は終わった。平和が本当に来た・・・」実感が湧いて来ました。

バクチ場

９月に入って急檄に兵舎の規律が弛み出しました。私達の兵舎は何故か「賭場」と化しました。どこからか真新しいトランプが持ち込まれ、毎夜「オイチョウカブ」が開帖されたのです。見ていると、不思議なことに体格が良く、やたらに勝負の強い男が現われ、瞬く間に金をかき集め胴元となり、君臨しだしました。大分後になって手品のようにトランプを自由に扱えるイカサマ師がいると聞きました。その時は世の中には賭博の才能「ばくさい」のある人間っているんだと感心して見てました。自分には

そんな才能はなさそう、こんなのを相手に勝負したって絶対に勝てるわけがない、賭博経験無しに終わりました。そして軍隊と違う秩序が生まれようとしていたのです。

脱出

「こんな処に長くはいられない・・」以前マロスに米を運びに来て顔見知りだった海軍下士官に会社への伝言を頼みました。「会社の整理に必要だから、永江を除隊させてくれと言って欲しい」伝言を頼みました。それが届いて９月中旬外、下士官の車でマカッサル支店に戻りました。こんなことで、私には多分兵籍は残ってないはずです。同じ頃、台湾出身の翁君は同時に入隊した仲間と盛んに連絡を取り合っていたようでしたが、何時の間にか姿が見え無くなっていました。「あぁ、やっぱり彼は外国人だった・・」

逃避行

マカッサルも騒然としていて長くいられません。マロスに戻ったら、米集荷トップの私への雲行きは相当悪いらしい。「長く居ては拙い」その夜の内に北方行きトラックに便乗、百数十キロ離れたパレパレに移り、次いで以前にいたワタンソッペンまで避難しました。

終戦時南興社・社員配置

ちょっと・ひと言

南洋浪人（ゴロ）

戦前ジャワ・シンガポールを舞台に、小さな新聞、雑誌などを出し、進出企業から寄付金などを集めて暮らした人達がいました。その人達がマカッサルにも海軍の嘱託などになって来でいました。南方滞在が長く、言葉も自由な上、土地感もあったのでしょう。占領当初は現地案内、住民との融和仲介の役などをしたようです。私が支店の庶務係になり立ての１９４２年８月南興社長栗林徳一さんがマカッサルに来たことがあります。その直後見るからに曰くありげな風貌の人物が事務所に現れ、名刺の裏に「栗林先生　正に領収しました」と書いて、数千円か当時としては驚くほどの大金を持ち去りました。「あれが南洋ゴロだよ」主任は教えてくれました。その後１年もたたず彼が主宰する土建会社が生まれていました。マロスに赴任したら、その会社の出店も出来ました。キャップは元満州浪人とか、右翼がかっていましたが、体の大きいいかつい顔に似合わない優しい人でした。社長の名刺の一件は遂に話さずに終わりました。

第一虎丸由来

第８話のジャラン沖で米の荷役で私が出会った日本の機帆船「第一虎丸」戦前の由来が分かりました。太平洋戦争初期、日本海軍がアンボン島、ニューギニア各地を占領の際、水路教導の任に当たったのは、海軍嘱託として従軍した塩原副（そゆる）氏

でした。氏は、明治末期（１９１０年）以降、グアム島清水商会で帆船の船長として、南洋貿易業務に従事していましたが、大正十年（１９２１年）同商会の事業を受けついでいた南太平洋貿易から、その所有船舶を引受け、塩原海運商会として独立しました。

昭和５年（１９３０年）かって清水商会在職当時、自らが設計、完成させた機帆船「第一虎丸」を駆って、蘭領東印度（現インドネシア）の沿岸運航に乗り出しました。オランダの国策汽船会社ＫＰＭの執拗な迫害にも屈せず、ジャワ島スラバヤ港を本拠地として活躍、これら海域の主的存在になりました。（南興便り・武村次郎氏）

（註）塩原副さんの息子進さんは、開戦前南興会社ニューギニア・サルミ事業所に勤務、太平洋戦争勃発直後捕らえられ、マノクワリ、アンボン、バンダネイラ、マカッサル、ジャワを経てオーストラリア南部に抑留され、１９４２年１２月交換船鎌倉丸で帰国しました。第一虎丸その後の消息は掴んでおりません。

関係年表　４１，１２／８　　開戦
１２／２０　陸軍・フィリピン・ダバオを攻略
１２／２２　フィリピン・リンガエンに上陸
１２／３１　頃 マカッサル在住日本人は、マナド、 アンボン、 ニューギニアから連行された邦人と共に、ジャワ島に送られた
４２，　１／２　　フィリピン・マニラを占領
４２，　１／１１　海軍。マナドを占領
１／１５　日本人居留民ジャワからオーストラリアに移送された
１／２５　バリックパパン占領
１／３１　アンボン島占領
２／１９　バリ島占領
２／２０　ティモール島占領
３／１　　日本軍・ジャワに上陸
３／９　　バンドン占領・オランダ軍降
１０／９　　日本人居留民交換船鎌倉丸で帰国
４３，　　日本陸軍第２方面愚軍司令部をセンカ ンに、司令部守備隊をマリンプンに置く。兵力３万人と言われる。 海軍はマナド、マカッサル夫々五千人と言う。初代司令官は阿南大将（最後の陸軍大臣）
４４，　４／２２　米軍アイタベ、ホーランデイアに上陸
５／６　　西パプア増援船団９隻中３隻セレベス 海で撃沈され、約２千人を失う。
５／２７　米軍ビアク上陸、８／２０占領される
７／１　　マノクワリ陸軍１万５千人、ベラウ地峡に撤退を開始する
８／１８－１９　ルソン島沖で日本輸送船団２０隻中７隻、護衛艦３隻撃沈さる
９／１５　米軍モロタイ島に上陸　（モロタイに基地構築、 ハル マヘラ、セレベス、ボルネオ　フィリピン方面へ

空爆撃熾烈）
９／下旬　陸軍、マナド地区の防衛方針を放棄、中央セレベスに兵力を撤退する。
１０／１０　米軍レイテ島に上陸
１０／２３－２６　フィリピン海戦 日本・戦艦３、 空母４、重巡６、軽巡３、駆逐６、米空母３、駆逐３沈没
１０／２５　特別攻撃機、初出撃 空母１撃沈
４５、　１／９　米軍ルソン島リンガエンに上陸
２／１９　米軍硫黄島に上陸
３／３　米軍マニラを占領
４／１　米軍沖縄に上陸
４／１８　米軍フィリピン・ダバオを攻撃
４／３０　連合軍ボルネオ・タラカン島に上陸
５／１０　連合軍ミンダナオ島に上陸
６／２３　沖縄３２軍司令官自決、死者日本軍６５６３１人、県民約十万人、米軍１２２８１人
６／２４　連合軍ハルマヘラに上陸
７／１　連合軍バリックパパンに上陸
９／２　蘭印方面日本軍降伏
４６，　６／上旬　南セレベス、在留日本人、陸海軍将兵パレパレ港より乗船、帰国を完了する

第１２話　居留民・スリリ収容所

マリンプンからスリリへ

１９４５年（昭２０）８月１５日敗戦の日から少し経って、南セレベスの在留邦人は、各地に適宜集まり集団生活を始めました。私の入ったワタンソッペン宿舎もその１つです。１０月に入って連合軍命により、日本人は全員１ケ所に集まって帰国を待つことになりました。指示された場所は、マリンプン砂漠でしたが、１０月下旬その一部は、開設に私も参加した「南洋興発スリリ直営農場」で野菜栽培を始めることになりました。

１１月には、ここを拡張しマリンプン収容所向けの野菜供給基地とすることになり、要員とし南洋興発社員全員がスリリ農場に移りました。（最初マリンプン収容所に全員が集まったとは、小林報告・後掲を読むまで忘れておりました）１１月私がスリリに行った時は、南洋興発社員全員が入られる大きな宿舎（第２寮）が既にあって、井戸・炊事場・水浴び場などが出来上がっていたし、次々入って来る人達の宿舎も順次建てられていました。

パレパレ方面からスリリに行くには、ピンランの街の手前から東へ間道を入ります。道は今は舗装され、トラジャから流れるサダン川から分水された、大きな潅漑溝が道路と並行して流れていますが、当時も椰子や様々な木が良く茂って、豊かな土地に見

えました。見た処湿地帯で、野菜は高畝栽培だったようです。マリンプン砂漠の伏流水の道筋になっていたかも知れません。

スリリ収容所に入ったのは、一般企業民間人と民政部、府の公務員など併せて６、７百人位だったようです。その中で内南洋興発は子会社を併せて百数十人、１番の大所帯でした。

自治制・自賄い

スリリ農場はマリンプンの収容所本体から遠く離れていたこともあったのでしょう、１種の自治体として運営されたようです。旧陸海軍関係者の姿は見たことがありません。収容者の中心になった南洋興発社は、パレパレ、ピンラン地区を含む南セレベス全地域で米集荷と軍向けの野菜栽培をやっていましたから、各企業よりはこの地域の土地感もありました。集まった人達も各企業の社員と公務員、ここに来るのに、それぞれが缶詰などの保存食品、酒などを持込んでいたのではないでしょうか。また収容所を仕切った幹部団も、上手に食料調達ができたのだろうと思います。後に知ったマリンプン旧軍の炊事班が行ったと言う「ピンハネ・クスネ」など、ここでは全く無く、給食は充分だったとは言えないが、まずまず普通の食生活が確保されていたと思います。

監視兵

スリリ収容所には監視の兵隊を見た記憶は、私にはなかったのですが、オーストラリア兵がいたそうです。でもそんな程度の存在で、外界との境界の仕切りも無かったようです。ワタンソッペンの宿舎にいた時は、２，３回、カウボーイハットを斜めにかぶった品の良くないオーストラリア兵が「臨時検査」の名の下に、自動小銃を突き付けて掠奪し、閉口しましたが、ここに来てからは寮内に兵隊が立入いったことは、１度も聞きません。 スリリの日常に、その種の逼迫感は全くない平穏な暮らしを、完全な自治集団が機能させていました。

ご飯炊き

私達が入所した頃、新たな炊事班が編成されました。班長は南興社の安田さん、我が社からは私と石原さんが飯炊き要員として送り出されました。志願したのたか指名されたのか覚えておりません。各団体から応分の人員が出ました。炊事班には飯焚き員と惣菜作り員があり、飯焚きには若いしろうと、惣菜作りは調理経験者が多かったようです。ご飯炊き要員は、私達の外沖縄班２人、民政府から１人か２人、興南組の１人が記憶があり、全部で１０数人だったのではないでしょうか

飯炊きの寝床は平釜の前にずらりと並んでいました。釜の直径は１ｍ，１釜は１度に５、６０人分のご飯が炊けます。褌１本の姿で釜１つを１人が受持ち、毎度薪で炊きました。夜明け前朝５時前に作業にかかり、炊き上げたら釜を洗い次に備えます。それを１日３度繰り返すのです。慣れたら上手に炊けました。薪は係がいて運んでくていました。翌年帰還の朝まで、１７０回余り飯を炊いたことになります。炊事班の暮らしで作業仲間に友も出来、それなりに楽しく過ごせたのですが、折角南セレベス

全土から南興社員が集まった貴重な機会だったのに、私は会社の人達とは宿舎が隣接していたとは言え別棟でしたから、交流の機会が少なく、共通の思い出が少ないのが心残りになったいます。

マリンプン

在「南セレベス」の日本人収容所本体は、スリリの北方１２，３ｋｍに広がるマリンプン砂漠北の一画にあり、陸海軍人と在留邦人の１部、併せて２万人が抑留されたと云われます。マリンプンに入るメインルートも、ピンランを過ぎて東に入る道だったようです。この地方の中心ピンランの周辺は一帯が平坦地で、肥沃な米作、椰子園などが拡がっているのに、マリンプン付近だけは何故か緩やかな起伏の多い砂漠状の大平原、貧弱な草が所々生えるだけの不毛の大地、民家らしい民家は全くないところでした。

陸軍の基地だった

１９４８年太平洋戦争の中期、ハルマヘラ島、セレベス北部に駐留した陸軍は、アメリカ軍がニューギニア東部の攻略を行い、次第に西部に侵攻するのに伴い、そこから撤退することとなり、セレベスの陸海路を通って南部に後退しましたが、その陸軍数万人が、ここマリンプンを中心にトラジャ、ワジョ地区に新たな防衛基地を展開させました。この砂漠には陸軍用の小さな飛行場も設けられたようです。

暗い過去

しかしマリンプンは、第１次欧州大戦の際、太平洋１帯に駐留したドイツ兵捕虜の抑留所が設けられ、その与えられた生活条件が大変厳しかったので、相当数の犠牲者を出したと伝えられる曰く付きの場所でもありました。

沖縄班

スリリに集まった沖縄出身の人達は、１つの宿舎にまとまることになりました。南興の子会社マカッサル水産所属・糸満玉城組の漁師連中もそこに入りました。班長には広島高師出身の若い行政官がなり、きびきびと指揮を取った姿が印象に強いです。何故沖縄県人だけが１つにまとまったのか、次第に事情が分かって来ました。沖縄はアメリカの占領された後直轄軍政下に置かれ、沖縄県出身者は本土に帰っても、そこからすぐ沖縄に戻られないことが分かって、その事態に統一して対応する必要が あったのです。

碁・マージャン

早朝に起き、大きな平鍋でご飯を炊き、鍋を洗って、食事して、それを日に３度繰り返す生活・・あいた時間は寝るか、碁を打つか。 マージャンのパイは器用な人の手で、あちらの竹を細工していく組も作られ、大変盛んに行われました。私も一応最低のルールを習ったけれど、ついに好きになれませんでした。碁の方は、ご飯炊き仲間沖縄玉城組事務係の大城さんは詰め碁の達人で、彼に徹底的にしごかれ、あちらにい

た時は１級並みに腕が上ったようですが、帰国してからは続かない。私に勝負事は根っから性に合っていないと分かりました。

ゆかた

炊事班の仲間に習い、白地の生地で浴衣を一着縫い上げたことがありました。もっとも、それ以前辺地の暮らしの中で自分のパンツを何枚も縫ったことがありました。

たばこ

スリリでどんなタバコを飲んでいたのでしょう。紙巻きではなく多分セレベスで採れるタバコを、自分で一々紙で巻いて飲んでいたのではなかったかでしょか。酒は無ければないで済む程度でした。

お汁粉が好きになる

そんな暮らしの中で、皆に一番人気のあったメニューは何と云っても「お汁粉」でした。私は子供の時から「甘いもの嫌い」変な子どもでした。始めは「汁粉」を横目に見て、お焦げか何かをかじっていましたが、何時の間にか人と同じように食べ出したら、美味しさも判るようになっていました。帰国以来社会生活が長くなるにつれ、弱かったお酒の手も人並みに、今は「両刀使い」と云われます。

風呂ふき大根 ここで始めて知った味でした。賄いだけの役得料理ではなかったはずです。大根料理は好きでなかったのが、これを食べてからすっかり変わってしまいました。これをつくっている時の調理担当のおじさんの得意な顔が思い出されます。茄子の油炒め 随分食卓に上がりました。

逝った人

マリンプンの高台に日本人埋葬地がありました。私より１、２歳年下、群馬県出身の小林賢一君が、スリリに来てから病気で亡くなりました。病床を見舞ったかどうか、病気になる前にお話した記憶もあるし、彼の優しい顔を覚えています。その埋葬に加わるのに砂漠の道を１０ｋｍをとぼとぼ歩いた覚えもあります。どちらかの手の骨を会社で持ち帰りました。南興会社マカッサル事業所で４年間の内に亡くなった人は彼１人でした。

英国史

マロスお知り合いになった台湾拓殖の所長さんからか、後に出来た図書館からだったか、一冊の本に出会いました。「英国史」著者はアンドレ？何とかと言ったように思います。分厚い本でしたが、夢中で読みました。強い衝撃を受け、一生記憶に残る本の１つになりました。 第１ 日本が戦いに敗れたのは「アメリカの武力に敗れた」と言うより「世界の潮 流・民主主義」に敗れたのだ・・と知りました。「歴史の潮流」とには、何者も抗しがたい力が働くと分かったし、今出会おうとしている民主主義は、今まで自分が生きて来た世の中より心地良いものらしいと感じました。

第２に、英国民主主義の始めの基盤は、第１回「選挙法改正法」は１８３２年に実現、１８６７年更に「選挙法改正法」があり、第３回目の「選挙法改正法」１８８５年で「小選挙区制」となりました。これは「不正選挙」が行えない仕組み確立が前提なのです。私の生まれる４０年前、明治維新の少し後、これはついこの間の出来事とも言えるし、その達成までに大変な時間と犠牲があったのも分かったのです。

スリリ温泉（アイル・パナス）

マリンプンに通ずる道を１ｋｍほど行った道端に、温泉（アイルパナス・熱い水）がありました。私が始めてスリリに行った頃は温泉のあることは全く知らなかったし、もちろん入浴施設はありませんでした。陸軍が作ったものでしょう。屋根のかかったコンクリート作りの立派な浴槽をいくつも備えた温泉でした。炊事の仲間と連れだって何度か入りに行きました。温度は大変高温で、まともに足から入ることが出来ず、お尻から恐る恐る入ったのを覚えています。１９９６年５０年ぶりに尋ねたら、浴槽は廃虚となって荒れ果てていました。あちら人には温泉入浴の習慣がないらしいのです。

彷徨する兵士・反戦の原点

スリリ収容所と温泉の中間の森に、陸軍病院があり、温泉の行き帰りにそばを通りました。建物がどんな規模で、どれだけの人が入っていたか全く覚えていません。私は戦争中、爆撃で破壊され廃虚となったマカッサル市街を見た以外、幸い戦場に立ったことがありません。唯１つの例外は、敗戦直前４５年５月、米軍爆撃機Ｂ２９がマカッサル上空で撃墜され、マロスとパンカジェネの境界付近収穫の終った田んぼに墜落、その現場を見たことがありますが、１０人近い搭乗員の死骸が、辺り一面に散乱した悲惨な光景を見ました。

「玉砕」と聞けば綺麗ですが、現実は正視に耐えない惨たらしいものです。４４年マロスに来た坂幸栄君は、ハルマヘラ島の戦火を逃れ、セレベスを陸路南下して来た人ですが、出会った戦場の様子は全く話してくれませんでした。４５年５月一緒になった坂田隆三郎さんも、ニューギニア・マノクワリからアンボンを経て海路逃避行中、マカッサル沖で船が沈められ、漂流、救われた人でした。でも、その時のことは坂君同様に話しませんでした。

温泉往復の途中病院の前で、そこに彷徨（と見えた）する１人の兵士を見ました。彼の半袖と半ズボンから見えた手足は、これ以上細くなれないと思うほどがらがらに痩せ、それでいてお腹は大きくポンと膨らんでいました。飢餓、栄養失調の終末の姿だと云うのです。それでいて腰に空き缶を下げ、キョロキョロと地面を見回して歩いていました。食べられる物を探している風でした。この病院に入ったら一応の食事は出ている筈なのに・・・。

ニューギニア島西部前線から逃れた民間人や兵士が、逃避中飢餓、マラリアでむざむざと命を失った上、残った人々のいけにえになったと言う事実を、ひそひそ話しで聞きました。この兵士の姿に無法無残な、悲しい南方戦場の姿をかいま見た思いがしました。

「セレベス戦記（後述）」によると、マリンプン収容所内の病院にも「西部ニューギニアから、骨と皮ばかりになって移送された捕虜（兵隊）の一群がマリンプンの草原の農耕に立ち向かったとき、ここでいよいよトドメをさされるかと思ったらしい。事実彼らはバタバタと倒れていった」（原文のまま）とあります。病院で見た兵士、５０年を過ぎた今もあの姿ははっきりと脳裏に焼き付いています。この記憶がある限り、どんな理由があろうとも、１切の戦争を許せない、私の反戦の原点なのです。

沖縄相撲

唐手の名手鬼舎場朝信君と知り合いました。彼は追い込み漁業玉城組漁師の一員でマカッサルにいた頃から、勇名を轟かせた人です。 体は大きくなかったけれど筋骨隆々、足の代わりに両方の拳で体を支え、コンクリート床を軽々と歩く手練者です。でも当時沖縄の人達は、日本式相撲を知りませんでした。沖縄相撲は腰に帯を締め、あらかじめ互いにそれを握って始めます。蒙古相撲に似ています。猛者が技を知らないのに乗じ、力だけでまともに押して来るのを２、３回土俵下に、派手にうっちゃりで投げ飛ばして、大いに彼を悔しがらせました。すぐ手を覚えた彼には、もう敬遠し逃げ回るばかりです。卑怯のようだけれど、マカッサル時代彼とけんかをした相手は１週間も寝込んだと言う伝説を聞いていたからです。沖縄と本土には、当時こんな文化の違いがありました。

沖縄芸能

所内の暮らしも少し落ち着いた頃、広場に舞台が作られ、演芸会が行われました。そこで披露され驚いたのが「沖縄の歌舞踊」でした。演技者は南興の子会社、糸満玉城組の漁師達の年寄り連です。素晴らしく美しいきらびやかな舞台衣装、楽器（三線、太鼓）がどうしてここにあるのでしょう。演じられたもの、沖縄言葉も芸能の由緒も全く分からない、始めて見るものなのに、素人の目にも本物の芸です。圧倒されました。漁師の集団にどうしてこんな芸があるのだろう。この時始めて沖縄に優れた独自の「沖縄文化」のあることを知ったのです。この時一緒に演じた本州勢に、これに匹敵する芸能が見当らなかったのです。本土の庶民にこれに匹敵するものが、何故無いのだろう考えさせられものです。この感動で、一生熱い沖縄フアンになったのです。

差別

南方で沖縄、台湾、混血児その他の人たちに対する根強い差別が、本州出身者全体ににあることを知りました。幸い北海道生まれは差別対象ではなかったが、何故だろうと驚きました。私には全く身に付いていない感覚だったのです。もちろん北海道にも昔アイヌ人への差別がありました。幼い頃同じ年のアイヌの子と１緒に遊んだこともあります。でも私には差別の思いが身につかなかったのです。

マカッサルの南興会社には、センカンの主任安永さんが台湾人、森（今吉）さんはミナハサ（マナド）ダブルスでした。私は森（今吉）さんには、マカッサル上陸当初イ

ンドネシア学を専ら学んだし、安永さんにはセンカン・ジャラン最初の辺地勤務で、大変なお世話になりました。差別どころではなかったのです。本州人の差別の事は知ったけれど、私には全く身に付くことなくセレベスを終えたのは幸いでした。前記のお２人はスリリ農場には参加されなかったようです。

飛び出さないか？……

スリリ暮らしが３、４か月経った頃、ほとんど日本の事情も掴めないし、何時帰国できるか判らない、段々いらいらする気持ちが高ぶって来ていました。１番親しかった同年のＧ君に「ここを飛び出さないか」私が持ちかけました。私１人で出るのは自信がないが、Ｇ君はマカッサル語も堪能だし、彼と組んだら何とか現地で生きて行けそうに思ったのです。「いや、俺の実家は年とった母親１人、だからとにかく帰る」それで話は終わりでした。

そう言った私は４３年後の１９８９年、Ｇ君に連れられセレベスに行くまで、大人しく北海道で暮らしました。Ｇ君は自由業だったこともあり、２０年程前から何度もセレベスに行くようになら、事業をやって前後７～８年間暮らしました。５５数年前のある日、ひょっとしたら私もインドネシア永住の道を辿っていたかも知れないのだと思うと、残留者・国際結婚組には「他人でない・・・」心情が動いてしまうのです。

地獄のマリンプン収容所

「セレベス戦記」と言う本があります。セレベス島は東ハルマヘラ、北フィリピン、西ボルネオ島、周囲が全部連合米軍に上陸され戦場となったのに、何故か無傷で残されたこの島の戦記です。陸軍軍人の立場から書いたものなので「そんなことがあったのか」これを読むまで全く何も知らなかった私には大変貴重な資料です。

京都大学卒業・元陸軍少尉奥村明さん著、１９７４年４月発行されました。奥村さんはハルマヘラ島に上陸直後から遭遇した、米軍の攻撃による苛烈な戦場から奇跡的に脱出、北のマナド（メナド）でも何度も空爆を受けて後、部下３０人と共に陸路２千ｋｍを徒歩で南へ辿りつきました。敗戦の後、最終的に入った「マリンプン収容所（抑留所）の生活は地獄だった」と言います。前述のようにマリンプン収容所（抑留所）は、収容所の本体があった所で、ここの状況の一面を知ることができました。

１２月上旬の集合命令から、翌年６月１５日引揚船田辺港到着までの記録です。

鬼畜米英・撃ちてし止まむ

戦争中国内の士気を高めるために、こんな標語が張り出されたと聞きました。その反動か敗戦になったら、兵隊たちの間に「本州はもう何もかも無くなった。男は皆去勢されるし、女も強姦だ。捕虜は船に乗せられたら、途中で海に投げ込まれるだろう」こんな会話が真面目にあったそうです。（私達の間では、そんな話題は全くありませんでした。でも前途が全く見えなかったのは同じです）

またまた行軍

トラジャ・ランテパオ近在に駐在していた奥村さんと部下３０名は、なぜかこの小隊だけ徒歩でマリンプン行きを命ぜられました。砂漠、炎熱下の草原３０ｋｍを含む２００ｋｍの道程を、１週間かけて踏破してマリンプンに到達したのです。

砂漠の農作業

隊は陸軍病院付属の農作業に従事しました。肥料っ気の全くない砂地、連日炎天下８時間の労働が行われ、過酷そのものでした。

ピンはね・くすね しかし、奥村さんたちをもっと苦しめ、衰弱させたのは貧弱な給食でした。連合軍から支給される米は、１人１日３１０ｇ（２合１勺）です。しかし、実際は運んで来る兵士（日本）が途中でくすね、収容所入口で連合軍の監視兵がくすね、倉庫に入ってから番兵が役得でくすね、各隊の炊事班員は自分たちが充分に食べた残りを分配する・・了いには１日１人１合５勺の粥食になりました。そして分かったことは、倉庫係はくすねた米を病院に持ち込んで薬用アルコールを入手、晩酌をやっていたことでした。役得にあずからない一般兵の多くは飢餓、栄養失調状態となり、暴動寸前の状態になっていたのは当然の成り行きです。

アンボン人軍曹

もう一つの災難は、監視にアンボン人軍曹率いるアンボン兵がついたことでした。アンボン人軍曹はオランダ軍捕虜として日本本土に送られ、３年間貧しい給与、激しい労働、その上徹底的に日本兵看守のしごきに遭い、日本人に対する恨みは骨の髄まで達していた人だったようです。その人に、奥村さんはうっかり敬礼を怠って、すっかりマークされてしまいました。そんな折、悪いことにアンボン監視兵による宿舎の臨時点検があって、禁止されているインドネシア人部落の物々交換で得たアヒルのたまごが見つけられてしまいました。

奥村さんは隊員６人に見せかけの、激しい制裁を加えたのですが許されず、無期重営倉（軍隊の刑務所）入りに処せられました。ここはもちもん乏しい倉外の食事よりもっと厳しい。奥村さんたちは自分貧しい食生活の中で工面して、やっと取れたちびたさつまいもを手に差し入れに通ったと言います。

帰国

そんな困難のさなか、５月上旬「帰国が繰り上げられる」と発表があって、やっと事態は収拾されました。６月５日、奥村さんたち第５梯団３千人はパレパレを出帆、６月１５日和歌山県・田辺港に帰国しました。

リンチ（私刑）

上陸の前夜の田辺港で、凄まじい兵士たちの旧将校に対するリンチが１晩中続けられ、奥村さんも例外では無かったといいます。

引き揚げ完了

南セレベスからの引き揚げは、次の第６梯団３千人で全部終ったとのことです。

地獄はなぜ起こったのか？

奥村さんたちの受けた災難は、誇張ではなく確かに事実だったのでしょう。でも「セレベス戦記」を良く読むと、奥村小隊の苦難の元は乏しい給食にあり、それは身内の不当な食料ピンハネが直接原因と言うことが分かります。マリンプンには奥村小隊の外に、２万人の軍人民間人がいましたが、その全部が地獄の憂き目に会っていたのでしょうか。

スリリも基本的米の配給量は差がなかったはず・・でもスリリは天国とは言えないまでも、地獄ではなかったと思うのです。地獄と天国の差はどうして？ 非常に困難な状況下で・・「スリリでは民間人の合理主義、民主主義、富力、指導者の英知が働いた」のに対し、奥村さんのいた「軍隊には、人間の英知を奪う軍隊の持つ硬直した悪い縦割り組織、伝統、弊害がまともにかぶっていた」そうではないかと思うのです。

物々交換

抑留生活も終わりになる頃、スリリでは夕方になると道路と反対、森の境界の「仕切り」越しに、人が集まる場所が出来ました。物々交換場です。現地妻や子どもとの面会もありました。外の情報も色々入っていたようです。物交で私は「アラビヤ文字の小さな金貨・ダンロップ製ごついゴム長靴・連合軍流れの缶入りタバコ、食品の缶詰」を手に入れました。こちらからはセレベスのサロン、金の指輪を出したように思います。

帰国準備

私達の帰国準備は、４月下旬か５月上旬から始まったようです。 乗船の際に荷物検査がある、貴金属は持って行かれない、港まで大分歩かねばならないことも予告されました。所内は荷物整理で慌ただしい空気に包まれました。私は金貨は手製のブリキの水筒の内側に貼付て貰い、長靴と碁盤碁石、椰子の実を茄子の形にしたタバコ入れを用意しました。トランクはどこかで仕入れた皮製、欲張った荷物は随分重いものになりました。

帰国港パレパレ

乗船地パレパレ港（マカッサルから北に１５５キロ）は、南スラウェシ２番目の港湾、波止場近くに南洋興発会社のきれいな事務所があって何度も泊まったこともありますが、４４年爆撃で街全体が壊滅させられ、姿はすっかり変わったとのことです。早

朝暗い中荷物を背に何 km か歩き、少し明るくなって「このままじゃあ、パレパレまでは体が持たないな・・」心細くなっていたら、トラックが並んでいて、パレパレまでピストン輸送となって、仮収容所に入りました。（註・この日の内に埠頭に行ったとばかり記憶していたら、一旦仮収容所に入り、２週間近くも待機させられたようです）

いよいよ出港 ４６，５、６

埠頭の先に広がる湾は、以前に見たことのある緑の密林を抱いた島が広がり、穏やかで美しい光景がありました。埠頭ではオランダ将校の荷物検査を受けました。大勢なので時間はかかったものの、私は何事もなく通過しました。私達民間人は南セレベスから最初の引き揚げ船だったようです。午後乗船、その日の夕方に出帆しました。

『さよならの歌』

サヨナラ　サヨナラ
淋しく　なつかしい言葉　サヨナラ
何度となく　使ってきた言葉
ある時に泣き　また　笑ってさけんだ
数多い想いを含めた言葉　小夜奈良　さよなら
今から　三年前　南セレベスの小港
パレパレ湾に浮かんだ　引揚船
アメリカの　リバティ型貨物船
赤く錆びた手摺りに　私達が寄りかかった時だった
船首に鳴る　ドラの音を聞き乍ら
西の海へ　赤々と輝いて
つるべ落しに落ちる夕陽を満身に浴びつつ
ぼんやりと　暮れて行く丘を望み
出帆を　呆然と　待っていた
その時だった
暗くなった街から　飛び出して来た人影
見る見る　船が少し離れた　埠頭に集まった
サロン一つの黒い子供たち
私達めがけて　サヨナラ！！　と叫んだ
その言葉　その声は　この土地に四年の別れの悲しみを
胸一杯にしていた　私達を　ガク然とさせた
数少ない　日本のコトバ　今　そう叫んで
送ってくれようとは　夢にも思わなかった
私の胸は　急に熱く潤んできた
サヨナラ　濡れて答えた　　アリガトウ　大きく叫んだ
昨年の敗戦から　絶望と　前途への不安に包まれ
心まで　垢だらけになっていた　私達
ぐっとこみあげてくるものがあった
舷にも　埠頭にも　人はますます増えてきた

声はいよいよ大きくなった
幼子を抱いた女性もいた　南妻の一人だったかもしれない
夕闇の迫った海の別離は　声の届く限り続けられた
サヨーナラ　アリガトー
総て　溢れる思い出を　振り切るように
船は　次第に　次第に　船足を早めていた

（註）これを書いたのは１９４９年冬のことです。まだ帰国の記憶がしっかりしていました。情景は実際のことです。古いノートにありました。 このメモを書き付けたお陰で、名画のワンシーンを見るように今も心に鮮明に想い出されるのです。

思い出の歌（インドネシア歌謡）
サヨナラ　サヨナラ　サンパイ　カタム（ブルジュンパ）ラギ」（サヨナラ　また会う時まで）

この歌を何時どこで覚えたか全く記憶がありません。でもこの歌を口ずさむと必ず「パレパレ出帆の夜」が思い浮かびます。サヨナラはもちろん日本語、インドネシアに行った先々で「この歌を知っている？」「知ってる！知ってる！」歌って応えてくれました。今も生き続づいている歌です。

インドネシア歌謡・トランブラン

バリの空港売店で求めたインドネシア歌謡のＣＤ・カセットがいくつもあり、今でも聞きおぼえのある歌があります。「私のインドネシアも満更じゃない」ニヤリとします。今歌えるのは「ブンガワン・ソロ」「トランブラン」「サプタンガン」「ノナマニスシャパヤンプリャ」とあと１つ位です。インドネシア国歌になった「インドネシア・ラヤ」のメロディも覚えています。上陸後最初に覚えた「トランブラン」がＣＤにないのが寂しかった。あの名曲がなぜ伝承されていないのか不思議です。

船の中で

船の寝床は、船底のスクリュウを回す車軸のそばが割りつけられました。帰る喜びでがらごろ回る音も気にならずに寝れました。船は途中１度も陸を見ることなく、大海原を嵐にも会わず真っ直ぐに走ったようです。

上り口説　　（ヌブイクドゥチ）

炊事班仲間大城昌英さんから、はなむけに沖縄で一番知られている古い島歌「上り口説」を教えて貰いました。大城さんは私の囲碁を手解きしてくれた、詰碁の達人でした。彼の書いてくれた「上り口説」は無くなっていたけれど、１番の歌詞とメロディは長く覚えていました。歌を口ずさむ度に収容所、友、知人１人１人が思い浮かびま

した。引揚げた沖縄県人は、福岡市の収容施設に入ったと聞きましたが、その後は誰とも連絡は途絶えたきりです。何年か前にＮＨＫで沖縄歌舞踊が放映、中に「上り口説」がありました。歌詞、メロディは記憶のまま、無性に懐かしかった。 驚いたのはその時の解説、沖縄の「上り」には中国・北京への旅もあったと言うのです。上りは京都か江戸だけと思っていましたのに・・・。

最近沖縄民謡テープを入手「上り口説」全文が分かり、遠い記憶を呼び起こしました。終りに桜島も読み込まれ、確かに本土上りの歌でした。でもこの歌は沖縄が薩摩の武力に支配されてから、ヤマトンチュー向けに作られた歌詞ではなかったかと思いました。それは余りにも大和言葉に近く、字で読めば全部意味が判るからです。

『旅の出で立ち　観音堂　　千手観音　伏し拝み（うがで）
黄金　杓取て　立ち別る
袖にふる露　押し払い　大道松原　歩み行く
行きば　八幡崇元寺
美栄地高橋　打ち渡たてぃ　袖ゆ道にてぃ　諸人ぬ
行くむ　帰るぬ　中ぬ橋
沖ぬ側までぃ　親子兄弟　連りてぃ　別ゆる　旅衣
袖とぅ袖とぅに　露涙
船ぬ艪綱　疾く解くとぅ
船子勇みてぃ　真帆（まふ）引きば
風や　真とぅむに　午未（んまひつぃじ）
またん巡り逢う　御縁とぅてぃ
招く扇や　三重城（みいぐしく）残波岬ん　後に見てぃ
伊平屋渡　立つ波押しすいてぃ　道ぬ島々　見渡しば
七島　渡中ん　灘安く
燃ゆる煙や　硫黄ケ島
佐田ぬ岬ん　走り並でぃエィ
ありに見ゆるは御開聞　富士に見まごう　桜島』

正岡子規

マロスで知り合った人の中に「理論右翼」青年がいました。帰国船の船ばたで、彼は「これから日本をもっと深く知るために、迷ったら正岡子規を読みなさい」と諭しました。でも不肖の弟子は、ついに今まで一度もそれに接することなしに終わりそうです。

紀伊半島・山の緑が綺麗だった

セレベスを経って、航海１０日目に本州が見えました。晴天、紀伊半島です。沖合なので街は見えませんが、海の上に出た山の緑の鮮やかさ、美しさ、私には初めて見たのに、無性に懐かしさが込み上げ、船ばたに長いこと立ちつくしていました。

名古屋村の畑

昭和２１年（１９４６年）５月２３日、セレベスからアメリカ軍リバティ型貨物船を使った引揚げ船で私達は名古屋港に着きました。　岸壁に残った飛行機格納庫のように大きな、確か三菱重工の倉庫で行われた帰国手続きは、まず盛大にＤＤＴを頭からかけられることから始まりました。引き揚げ証明書（私のナンバー・ト５０７１号）引き揚げ先、経路指定無し、日時期限制限無しの無料鉄道乗車券、それにお金が６、７百円が渡され、それで総ての手続きは終了です。持ち帰った毛布はただ１枚、１夜犬の子のように丸くなって寝ました。ここでの１日は給食を受けたのでしょうが覚えていません。　翌朝は暗い中汽車に乗せられました。一応は客車です。

名古屋駅までは徐行、夜が明けてあたりが見えて来ました。小さな家が所々に建ち、そこから朝餉の煙りが立ち登り、遠くはもやっていました。地面を見ると畑のようにうねを切ってあり、何が蒔いているらしく、ぼつぼつ緑色の葉が見えました。もっと良く見たら、垣根の跡の仕切りもあります。分かりました。そこは住宅の焼け跡で、それが一面畑に変わっていたのです。通る人も見えません。こんな景色は名古屋駅まで続きました。名古屋はすっかり村に戻っていたのです。

名古屋で乗り換えたのかどうか、東京までの１昼夜は乗り替えなしでした。静岡辺りで夜になったようです。途中大きな駅の辺りは、どの街もどの街もみな焼け野原が続いていました。途中何を食べて過ごしたのか記憶がありません。引き揚げ証明書の支給欄に乾パンの項目があったから、それ貰ったかも知れません。上野駅に辿り着いたのは早朝、晴天でした。

千葉市外・土気の旧家

名古屋港で全国の戦災被害状況を調べることが出来ました。幸い北海道の故郷は全く無傷と分かったら、むくむく良からぬ考えが湧いて来ました。「家には電報を打てば安心するはず、後は少し道草食って帰っても良いだろう」千葉市郊外のＧ君宅に寄ることにしたのです。土気駅から１㎞ほど入ったＧ君の実家は、杉林の裏山を背に、大きな茅葺き屋根、絵に描いたような日本の旧家で、老いたお母さんもご健在でした。私は厚かましくも４年ぶりに無事帰った息子と一緒にお家に飛び込んでご厄介になったのです。２泊はしたようです。大きなお握りを４、５個頂いて帰えることになりました。

千葉駅原っぱ・リンゴの歌

Ｇ君も新宿の親戚を訪れるので同行してくれ、千葉駅に立ちました。駅前一帯に露天の店が拡がって賑わっています。そこで初めて聞いた日本の歌が「りんごの歌」でした。

新宿は原野・防空壕が仮住まい
Ｇ君の親戚は新宿の東側にあったようです。晴天でした。一面の原っぱの中に広い道路が走っていました。左の新宿駅方向には焼けビルの一群が見え、右側はどこまでも

どこまで原野が見渡せました。道端の所々に盛り上がった処があり、そこは元の防空壕で東京人の住まい、親戚もその１つに住んでいました。

富士山・諏訪

午後中央線に乗り込みました。帰郷の前に富士山が見たかったのです。甲府を過ぎ西日に映える富士山がくっきりと見ることができました。思っていた通り素晴らしい大きな姿でした。松本まで行きたかったけれど終点は諏訪、宿に入ったけれど食事は出ない、お握り１つを大事に食べました。

日本アルプス・北上・お握りは酢えた

翌朝長野行きに乗車、晴天でした。松本では車窓から中央アルプスが望めました。私の故郷の周囲にも羊蹄山、ニセコなど著名な山がありますが、アルプスはその山の上にびょんともう１つ山が乗っている感じ、まっ白な雪を頂く山々が連なっていました。信じられない高さ、壮大さ、驚きました。やはり寄って良かったと思いました。長野から日本海に出て、ひたすら北上しました。あの頃急行列車が復活していたのでしょうか。私の乗った列車は全部各駅停車、時間がかかりました。朝夕通学、通勤の人達が乗り降りで辺りの人が入れ替わり、土地々の方言の変化を楽しんでいました。でも貰った大きなお握りを大切に残していましたが、秋田辺りでは少し傷んできました。目をつぶり、鼻を閉じて口に押し込みました。汽車に乗っていては全く何も買えないのです。後はわが家に着くまで、何も口できませんでした。

青函連絡船

青森港で乗船前に、またＤＤＴを振り掛けられました。白い粉を背中に吹き込まれると妙に寒気がしました。海上も寒かったのでしょう。４年ぶりの連絡船は、艀のように小さく頼り無いものでした、大きな船は皆沈められていたのです。　混み遭う暗い船の底にうづくまっておりました。

帰郷・戦後が始まった

函館から故郷の倶知安までは、今でも５時間ほどかかります。５千ｋｍ彼方南の国から長い旅に帰り着いた故郷、実家は街外れの段丘の縁にあり、なつかしい辺りの景色を眺めました。５月末近隣の山々には、アルプスと同様しっかりと雪が残っていました。第１印象は「寒い、寒い・・」でした。そしてセレベスは「もう１度行きたいでなく、きっと帰えって行きたい処・・」脳裏に刻み込んでいたのです。満２３歳を迎える寸前、私の戦後はここから始まりました。　　（完）